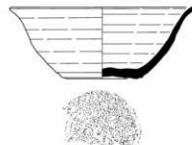


# 堀遺跡

(第17地点)

— 市道渡里35号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

堀  
遺  
跡  
(  
第  
17  
地  
点  
)



二〇〇九

水戸市教育委員会

2009

水戸市教育委員会

# 堀遺跡

(第 17 地点)

— 市道渡里 35 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2009

水戸市教育委員会



## ごあいさつ

堀遺跡は、那須茶臼岳を水源とする那珂川下流域右岸の台地上に位置する弥生時代から近世に至るまでの土地利用が累積した集落遺跡です。古代常陸国那賀郡の寺院・官衙遺跡である国指定史跡「台渡里廃寺跡」や県内有数の規模を誇る前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」などが残されており、古くから政治・宗教・文化の中心地であったと考えられております。

歴史的文化遺産である文化財は、一度は破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら、後世へと伝えていかなければならない貴重な財産です。しかし、近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつあります。そこで本市においては、文化財のもつ意義や重要性を踏まえつつ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところでございます。

この度、当該遺跡内におきまして公共下水道の新設工事が計画されました箇所につきましては、当初から遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねてまいりましたが、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至ったことから、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上の保護措置を講ずることといたしました。

今回の調査により、奈良・平安時代の堅穴建物跡等が確認され、古代那賀郡衙との密接な関わりが明らかになるとともに、地域社会の歴史を解明していく上で貴重な資料を得ることができました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました地域住民の皆様、並びに関係機関の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成 21 年 12 月

水戸市教育委員会

教育長 鯨岡 武



## 例　　言

1. 本書は、水戸市道渡里35号線公共下水道工事に伴う堀遺跡（第17地点）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社東京航業研究所の調査支援を受け、水戸市教育委員会が主体となって行った。
3. 調査概要及び調査組織は下記の通りである。

所 在 地 水戸市渡里町3209番2地先～堀町400番3地先

調査面積 264.55 m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年11月2日から平成21年12月12日まで

調査主体 水戸市教育委員会（教育長 鮫岡 武）

事務局 内田 秀泰 水戸市教育委員会事務局教育次長  
中里 誠志郎 水戸市教育委員会事務局文化振興課長  
五上 義隆 水戸市教育委員会事務局文化振興課長補佐  
萩谷 憲一 水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係長  
緑川 義規 水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係主事  
米川 暢敬 水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係文化財主事  
金子 千秋 水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

調査担当者 涼美 賢吾（水戸市教育委員会事務局 文化振興課文化財係文化財主事）

調査支援 林 邦雄（株式会社東京航業研究所）

調査参加者 加藤利男、河原井俊吉郎、栗原芳子、黒須秀昭、皆川幸子

4. 本書は、涼美・林と松浦史明氏（上智大学大学院外国语学研究科地域專攻博士後期課程）が分担して執筆し、涼美的助言・指導に基づいて林が編集した。
5. 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、一括して大串貝塚ふれあい公園水戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表したい（敬称略・順不同）。

長井光彦 東新建設株式会社

## 凡　　例

1. 文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。  
全体図1/1,200 各区全体図1/60, 1/80 土器1/2, 1/3 瓦1/3
2. 遺構実測図中のレベルは海拔高、方位は座標北を示す。
3. 遺物写真図版の縮尺は実測図と一致する。
4. 遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。

## 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘作業の経過	1
1-3 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の周辺環境	3
2-1 地理的環境	3
2-2 歴史的環境	6
2-3 堀遺跡における既往の調査	9
第3章 調査の方法と成果	13
3-1 調査の方法	13
3-2 基本土層	13
3-3 遺構	16
3-4 遺物	27
第4章 総括	31
引用・参考文献	32
写真図版	

## 挿図・表目次

第1図 堀遺跡の位置	3	第13図 7区遺構図	23
第2図 堀遺跡と周辺遺跡の位置	4	第14図 8区遺構図	24
第3図 堀遺跡調査地点	10	第15図 9区遺構図	25
第4図 基本土層図	13	第16図 出土遺物(1)	27
第5図 調査区の位置	14	第17図 出土遺物(2)	28
第6図 調査区方眼図	15	第1表 堀遺跡と周辺遺跡一覧	5
第7図 1区遺構図	17	第2表 堀遺跡における既往の調査一覧	11
第8図 2区遺構図	18	第3表 ピット一覧	26
第9図 3区遺構図	19	第4表 出土土器属性一覧	28
第10図 4区遺構図	19	第5表 出土瓦属性一覧	29
第11図 5区遺構図	20	第6表 出土遺物計量表	29
第12図 6区遺構図	22		

## 図版目次

図版1 調査区全景、1区の遺構調査状況	図版4 9区の遺構調査状況
図版2 1~5区の遺構調査状況	図版5 出土遺物
図版3 6~8区の遺構調査状況	

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 1-1 調査に至る経緯

文化財保護法第94条第1項に基づき、平成20年7月22日付下工1第582号にて水戸市長加藤浩一（下水道部下水道工事第1事務所扱）から、「埋蔵文化財発掘の通知について」が水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）へと提出された。

計画路線である市道渡里35号線（渡里町3209番2地先～堀町400番3地先）は、周知の埋蔵文化財包蔵地「堀遺跡」（遺跡番号201-064）の範囲に該当する。国道123号線を挟んで東側に展開する台渡里遺跡は、近年の調査成果から官衙もしくはそれに関連する遺構群が多く発見されている。堀遺跡はそれに隣接する古代の官衙関連集落跡と考えられ、明らかに当該地域において埋蔵文化財の分布が予測された。

こうした知見に基づきつつ、「埋蔵文化財として扱う範囲及び開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基準」（平成12年3月3日付文第162号）の「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」と照合・検討した結果、公共下水道工事は、原則Ⅰ「工事により埋蔵文化財が掘削され、破壊される場合」もしくは原則Ⅱ（1）「掘削は埋蔵文化財に直接及ばないが、工事により埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのある場合」に該当するとともに、発掘調査を行う上での安全確保のための一定条件を満たす見込みがあることから、工事着手前に本発掘調査を実施すること、記録保存の措置を講ずる必要があるとの意見を付して、茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）に進呈した。

県教委教育長からは、平成21年1月21日付文第1644号にて、工事によって遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響があるので、工事着手前に本発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議を要する旨勧告があった。

これを受け、市教委は、調査対象全体のうち沿線に面する住宅出入口及び交差点等を除く延長160.2m、面積320.4m<sup>2</sup>を対象とし、平成21年11月2日から平成21年12月12日の期間をもって本発掘調査を実施した。なお調査区内においては、既設水管等の搅乱が著しいところがあったことから、実質調査面積は264.55m<sup>2</sup>となった。  
(渥美)

## 1-2 発掘作業の経過

発掘調査は、平成21年11月2日から平成21年12月12日まで実施した。調査経過の概略は以下の通りである。

**1区** 11月2日に1区より9区までの道路アスファルト舗装の裁断を行った後、重機を用いて1区の表土除去作業を開始した。道路工事に伴う碎石層は予想以上に厚く、遺構確認面までの深さは約0.7～0.8mに及んだ。また、水道管理設に伴う搅乱も各所に認められたが、午後には竪穴建物跡1軒を確認し、同日のうちに遺構の調査に着手した。6日には遺構調査と各種記録作業、および基本土層確認作業（1区1号テストピット）を終了し、翌7日には埋め戻しとアスファルト舗装作業を行った。

**2区** 11月9日にアスファルト舗装の裁断と表土除去作業を行った。遺構確認面までの深さは約0.8mである。確認されたのは近・現代の芋穴状土坑1基のみであり、同日中に遺構調査と各種記録

作業を終了し、翌10日には埋め戻しとアスファルト舗装作業を行った。

**9区** 11月10日にアスファルト舗装の裁断と表土除去作業を行った。遺構確認面までの深さは約0.7～1.1mであり、精査の結果、土坑1基、溝1条、ピット6基を確認した。12日には遺構調査と各種記録作業を終了し、翌13日に埋め戻しとアスファルト舗装作業を行った。

**4・5区** 連続した地点であるため、車両の出入りを確保した上で11月16日に両地点のアスファルト舗装の裁断と表土除去作業を行った。遺構確認面までの深さは約0.7～1.0mである。精査の結果、4区において溝1条、5区においてピット1基を確認した。4・5区では他の調査区で削平されていた今市・七本桜軽石層が残存しており、本層で遺構の確認作業を実施した。18日に遺構調査と各種記録作業、19日に基本土層確認作業（5区2号テストピット）を終了し、同日中に埋め戻しとアスファルト舗装作業を行った。

**3区** 11月24日にアスファルト舗装の裁断と表土除去作業を行った。遺構確認面までの深さは約0.6mであり、精査の結果、近・現代の芋穴状土坑1基を確認した。同日中に遺構調査と各種記録作業を終了し、25日に埋め戻しとアスファルト舗装作業を行った。

**6区** 11月26日にアスファルト舗装の裁断と表土除去作業を行った。遺構確認面までの深さは約0.8～1.0mである。調査区の西半分が水道管により擾乱されており、全体的な遺存状態は不良であるが、精査の結果、溝1条とピット1基を確認した。同日中に遺構調査と各種記録作業を終了し、翌27日には埋め戻しとアスファルト舗装作業を行った。

**7・8区** 連続した地点であるため、車両の出入りを確保した上で12月8日に両地点のアスファルト裁断と表土除去作業を行った。確認面までの深さは約0.7～1.0mである。精査の結果、7区においてピット3基、8区においてピット4基を確認した。7・8区では他の調査区で削平されていた黒褐色土が残存していたが、遺構の分布は全体に疎らであった。10日に遺構調査と各種記録作業、および基本土層確認作業（8区3号テストピット）を終了し、11日から12日にかけて埋め戻しとアスファルト舗装作業を行い、全調査を完了した。  
(林)

### 1-3 整理等作業の経過

整理作業は平成21年12月13日より12月25日までの約12日間にわたって実施した。

遺物の洗浄・注記・接合作業および写真整理作業と並行して、写真測量を用いた遺構の図化作業をS T P（デジタル図化解析機）により行った。その後、遺構図面の修正・トレース、遺物の実測・トレース、遺物写真的撮影、図版作成、原稿執筆を行い、報告書編集作業を実施した。

(林)

## 第2章 遺跡の周辺環境

### 2-1 地理的環境

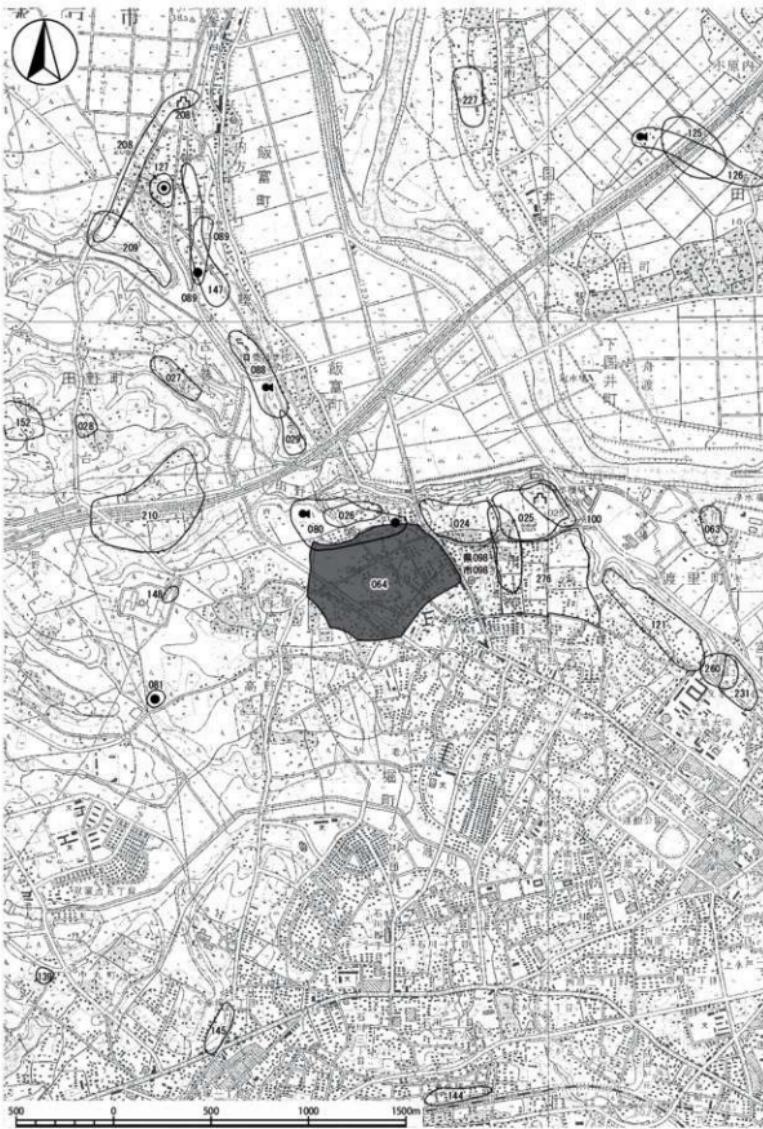
**市域の概観** 水戸市は、日本最大を誇る関東平野の北東部に位置する。市域の北部には、八溝山地を横切り、鷲子山塊と鶴足山塊とを南北に分ち、西から東へ流れる那珂川とその支流により沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。東茨城台地はその西端で八溝山地の外縁にあたる丘陵へとづき、市域西部を構成している。

その下流域右岸の大半を水戸市域とする那珂川は、栃木県の那須連山を源流として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地の間を太平洋に向かって流れ出る。この那珂川の存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが、水上交通により結ばれることから、歴史的に水戸市域が交通の要衝地となることが多かった。

**市域の地形区分** 市域の西部では、標高300m以下の低く起伏の小さい丘陵地帯が続く。これらは幅広で丸みを帯びた尾根と谷津田が谷奥まで認められる谷が樹枝状に入り込むのが特徴的で、良好な里山の景観を残している。縄文時代前期から中期にかけてのいわゆるキャンプ・サイトと古代～近世の生産遺跡が分布するのが特徴的である。他方、市域の沖積低地の右岸は左岸に比べて面積が狭小である一方、左岸は那珂川氾濫原の幅が広く、標高10m以下の低地帯が広がっており、古くから集落



第1図 墳遺跡の位置 (国土地理院発行 1:50,000「水戸」に加筆)



第2図 堀遺跡と周辺遺跡の位置（茨城県遺跡地図1：25,000「水戸」に加筆）

第1表 堀遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕山遺跡	集落跡	繩文土器（早~後）・石斧・石錘・土偶・赤土土器（後）・土鍬器・須恵器（古）	
23	文京1丁目遺跡	集落跡	繩文土器（早~後）・石斧・石錘・土偶・赤土土器（後）・土鍬器（古前）・須恵器（古・平）	
24	アツイ遺跡	集落跡	天保鏡（先）・繩文土器（早~晚）・石斧・石錘・土偶・土鍬器（古・奈・平）・須恵器（古・平）	
25	長者山遺跡	集落跡	繩文土器（早~後）・赤土土器（後）・土鍬器（古・奈・平）	
26	西原遺跡	集落跡	繩文土器（早~後）・土鍬器（古・平）・須恵器（古・平）	
27	阿川遺跡	集落跡	繩文土器（中~後）・土鍬器（古）・土鍬器（古・平）	
28	梵天遺跡	集落跡	繩文土器（早~後）・赤土土器（後）・土鍬器（古・後）・須恵器（古）	
29	施尾山遺跡	集落跡	繩文土器（前）・赤土土器（後）・土鍬器（古前）・須恵器（古）	
40	平塚遺跡	集落跡	繩文土器（中~晚）・石錘・土偶・赤土土器（後）	
46	平民坂遺跡	集落跡	縁鏡（先）・繩文土器（前~後）・土器片飾・石製品・赤土土器（後）・土鍬器・須恵器（古・平）	
47	富士山遺跡	集落跡	赤土土器（後）・土鍬器（古）・須恵器	
48	小原山遺跡	集落跡	繩文土器（中~後）・赤土土器（後）・土鍬器（古・奈・平）	
49	环河内遺跡	集落跡	土鍬器・須恵器（古・奈・平）	
64	堀遺跡	集落跡	赤土土器（後）・土鍬器（古・奈・平）・須恵器・灰陶陶器・筋鉢器・砾石・鐵鏽・鐵器・刀子・剪・瓦（古・平）・内耳土器・土鍬質土器・常滑燒・鐵盤・石臼（中）・瓦質土器・須恵器（古）	
65	中河内遺跡	集落跡	古墳（前）・土鍬器（金・平）	
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形埴輪・劍・刀（古）	方円1(2)・円墳1(2)
80	西原山古墳群	古墳群	土鍬器・圓筒埴輪・須恵器・勾玉・管玉・玉丸・玉葉・劍環・鐵簇（古）	方円1・円墳8(11)
94	梅原山古墳群	古墳群		円1(2)
95	梅原山横穴群	横穴群	土鍬器・須恵器・水晶製作小玉・ガラス製作小玉（古）	椭穴(4)
96	道土山古墳群	古墳群	土鍬器・圓筒埴輪・人物埴輪（古）	方円1(?)・円8
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・稻穗埴輪・刀（古）	方円1・円2(4)
98	台底里廻寺跡	寺塔跡	ナイヤイ形石器・男女首像有頭埴輪器・調頭（先）・繩文土器（前~後~晚）・石器・鉄製刀・鐵鋸・鐵削・鐵鍛・鐵製品・鐵鑄・羽門（古・平）・土鍬質土器・瓦・文字瓦・瓦條・陶製軸幅・金箔製品・金封・鏡・青銅製品・鐵鍛・羽門（古・平）・土鍬質土器（中）・内耳土器（中）	
99	田谷塚寺跡	官衙跡	土鍬器・須恵器・瓦・文字瓦（古・平）	
100	長者山城跡	城郭跡		
121	渡里町遺跡	城郭跡	繩文土器（早・中・後）・土鍬器（古・奈・平）・須恵器・灰陶陶器（奈・平）	
125	寝谷遺跡	集落跡	繩文土器（中）・赤土土器（後）・土鍬器（古・後）	
126	寝谷古墳群	古墳群		
244	鶴川遺跡	集落跡	繩文土器（中~後）・土鍬器・須恵器・石製品・土製品・鐵製品・木製品・軒平瓦（古・平）	
225	白石古墳群	城郭跡	舟形石器（先）・須器（先）・尖頭器（早前）・有舌尖頭器（早前）・石鑿（古前）	円5
227	宮元遺跡	集落跡	土鍬器（古前）	
228	上戸内山塙古墳	古墳	土鍬器・須恵器（奈・平）	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円(1)
230	荒神社古墳	古墳	繩文土器（後）・土鍬器（古）・陶器	円1(3)
231	文京2丁目遺跡	集落跡	赤土土器（後）・土鍬器（古・奈・平）・須恵器（奈・平）	
232	中河内遺跡	城郭跡		
236	台底里遺跡	集落跡	繩文土器（晚）・土鍬器・須恵器（古・奈・平）・铁製刀（古）・铁製鐮（古）・铁石（古）・黑土土器・灰化米・瓦（古・平）・内耳土器（中）・陶器・磁器・銅器・銅鏡・銅石（古）	

『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成10年度版）』に加筆

が營まれて現在に至る。これら低地帯に面した台地は、那珂川とその支流によって開析された樹枝状の支谷が深く入り込み、複雑な様相を呈しており、起伏の豊かな地形をなす。東茨城台地のうち水戸市域にあたる部分をとくに水戸台地と呼ぶことがあるが、上述の支谷によっておもに四つに細分され、北西からそれぞれ上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地と呼称される。

**台地の地質** 水戸台地の地質は、しばしば水戸層と呼ばれる第三紀層（凝灰質泥岩層）を基盤岩とし、その上部に、砂、礫、シルトで構成される見和層、上市疊層が続く。上市疊層は、約125万年前の最終間氷期最盛期（ステージ5e）におけるいわゆる下末吉海進からの離水過程で堆積したものである。これらを最下部に赤城水沼テフラ群を伴う火山灰で構成されたいわゆる関東ローム層が被覆し、現在の台地が形成された。

**遺跡の周辺** 堀遺跡は、水戸市堀町418番1ほかに所在し、いわゆる上市台地の北端に位置する標高約30m程度の台地平坦面に立地する。台地に北面して田野川が西から東に流れ、台地の北東縁辺に沿うように流れる那珂川に合流する。この合流地点は、台地の尽きるところにあり、那珂川が大きく蛇行し、南東方向の鹿島灘に向かって流れいくのである。合流地点より東にやや流れが緩やかになる地点があり、近世には渡し場があったと伝えられ、「舟渡」の地名を遺す。古代においては、この延長線上に東海道常陸路が推定されており、同様に渡河点があったと推測される。

台地縁辺部から斜面にかけては、風致地区として指定されており、豊かな緑を遺す。斜面を下りきったところには、各所で湧水点が確認されている。「常陸國風土記」那賀郡条では、郡家近傍に「泉に縁りて居める村落の婦女 夏の月に会集みて布を浣ひ 曝し乾せり」とする場所が存在するとあるが、これまでの調査成果を勘案すれば、那賀郡家は堀遺跡に隣接する台渡里遺跡周辺と推定されることがから、これら湧水点のいずれかであろう。「萬葉集」に詠われた「三栗の なかに向へる 曝井の絶えず通はむ そこに妻もが」(巻九-1745)の曝井が、常陸國那賀郡家の近傍だとされるのもこのためである。現在は愛宕町滝坂に推定されており、渡里町に連綿と続く古代遺跡群と那珂川流域最大規模の前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」との間に位置する。

(瀬美)

## 2-2 歴史的環境

堀遺跡は、古代集落跡をはじめとして、縄文時代から近世にかけて断続的に営まれてきた複合遺跡である。奈良・平安時代がしばしば注視されるのは、古代官衙・寺院遺跡として名高い国指定史跡「台渡里廃寺跡」に隣接する遺跡で、早くからその関連集落であるとの指摘がなされてきたからに他ならない。昭和20年代頃までは、この一帯は山林と畠地が多く、土地利用が緩慢としていたが、昭和40年代後半から徐々に宅地化が進み、往時の景観が失われつつある。

本節ではまず、堀遺跡周辺の遺跡について概観する。

**先土器時代～縄文時代草創期** 軍民坂遺跡からは、長者久保・神子柴文化期の石刃製錐器が(吹野・江輔 1998)、白石遺跡からは、橋本編年Ⅱ b期(橋本 1995, 2002)に帰属する角錐状石器(頁岩製)や、長者久保・神子柴文化期の尖頭器(頁岩製)、縄文時代草創期の有舌尖頭器(黒曜石製・頁岩製)・石鎚(ガラス質黒色安山岩製・頁岩製)が、それぞれ出土している(財團法人茨城県教育財團編 1993)。

台渡里廃寺跡下層からは、3点の石器が出土している。ひとつは南方地区塔跡の掘込地業の基底部直下のローム層から出土したメノウ剥片である。出土層位は第二黒色帶とみられる。もうひとつは、南方地区トレンチ2から出土した硬質頁岩製の男女倉型有柄尖頭器である。さらに長者山地区1区トレンチ1において、正倉院区画溝の覆土中からチャート製の二側縁加工のナイフ形石器が1点出土した。いわゆる「砂川期」のものとみられる。また、アラヤ遺跡では硬質頁岩およびガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器が各1点出土している。

以上、AT下位の橋本編年Ⅱ a期から縄文時代草創期にかけての石器が出土しており、更新世後半から最終氷期人類の土地利用が展開していたことがわかる。

**縄文時代** アラヤ遺跡では、昭和26年の調査において、後期堀之内式、加曾利B式、後期安行式、晚期安行式、千網式とともに大洞式が出土したと報告があり(大森 1952c)、東北地方との強い関連を

うかがわせる。また第1地点の調査では、台地縁に密集して早期後葉の堅穴状遺構8基が確認された（水戸市アラヤ遺跡発掘調査会編 1992）。遺物は、茅山下層式、茅山上層式、子母口式のほか、前期から後期にかけての土器が万遍なく出土しており、縄文時代における土地利用の活発さをうかがわせる。

中期後半では、砂川遺跡からは、加曾利E4式期を中心として、堅穴住居跡19軒、土坑141基、加曾利E4式期埋設土器14基が検出された（渡辺 1981）。堅穴の形状や炉の形態には地床炉、石開い炉、埋設炉があるが、時期による形態差は認められない。軍民坂遺跡第3地点でみられた加曾利E3式期の堅穴住居跡は、東北地方においてよく知られる石組複式炉をもつことが明らかとなった。県内でも類例が少ない貴重な例としてあげられよう。背景には、中期後半に東北地方の大木式土器文化圏と非常に密接な交流があったといえる。白石遺跡からは、加曾利E3式期からE4式期にかけての堅穴住居跡3軒が検出された（財団法人茨城県教育財團編 1993）。円形あるいは不整円形のものであり、加曾利E3式期の炉が地床炉であるのに対し、加曾利E4式期の炉は石開い炉であったのには注意したい。

**弥生時代** 弥生時代の遺跡としては、愛宕町遺跡、文京1丁目遺跡、長者山遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、軍民坂遺跡、富士山遺跡、小原内遺跡、塚宮遺跡、白石遺跡、文京2丁目遺跡が該当するが、表面採集により弥生時代後期土器が確認されている限りで、資料の蓄積が俟たれる。

**古墳時代** 古墳時代の集落遺跡のうち時期が判明しているのは、前期の文京1丁目遺跡、堀遺跡、中河内遺跡、後期の塚宮遺跡や白石遺跡に限られる。白石遺跡では、3軒の堅穴建物跡が確認されたが、いずれも鬼高式最終段階の土師器を伴っており、7世紀前半代と考えられる（財団法人茨城県教育財團編 1993）。

当該地域での造墓活動は活発であった。愛宕山古墳は、全長136.5mを測り、楯形の周壁を巡らす大型前方後円墳である。その墳形から中期古墳とみられ、採集された埴輪に黒斑がみられることから（井・小宮山 1999）、5世紀前半の築造と考えて大過ない。近傍には、かつて姫塚古墳と呼ばれる全長58m程の前方後円墳があったが、1971年に宅地造成のため破壊されてしまった。有孔円板と鉄刀の一部が出土したと伝えられ、盜掘孔の状況から粘土櫛であったと推定される（藤村・塙谷 1982）。愛宕山古墳に近い時期が推定されている（井・小宮山 1999）。

後期には、富士山古墳群、小原内古墳群が該当する。円筒埴輪や形象埴輪のほか直刀、鉄鎌などが出土したとされる。いずれも6世紀代であろう。

堀遺跡と範囲を一部重複する西原古墳群については、凝灰岩の横穴式石室をもつ古墳、須恵器・銅環・鉄鎌などが出土したという古墳（大森 1952a, 1952b）、埴輪を持たない古墳があるとの報告から、終末期の群集墳であるとの見方があった。しかしここれまでの試掘・確認調査では、埋没円墳の周壁覆土からの円筒埴輪の出土が確認されている。終末期に限らず長期にわたって断続的に造墓活動が展開された古墳群とみられる。

那珂川を挟んで対岸には白石古墳群がある。5基の円墳から構成され、2号墳の墳頂には凝灰岩片が散乱しており、横穴式石室の存在が想定される。また3号墳の南側からは石棺が検出されており、いずれも埴輪を伴っていないことから、終末期の群集墳と考えられる。

白石古墳群の北西には権現山横穴群が所在する。1号墓及び2号墓の玄室には線刻壁画が認められ

る。3号墓からはガラス製小玉と水晶製切子玉が、4号墓からはガラス製丸玉と金環2点が、それぞれ出土している。造墓年代は7世紀前葉とする見解（大森1974、生田目・稲田2002）と8世紀前後とする見解（川崎1982）とがあり、一致をみない。

**奈良・平安時代** 台渡里廃寺跡長者山地区については、従来から炭化米の出土が報告され、礎石建物跡が確認されていることから（高井1964、瓦吹1991）、那賀郡衙正倉院と推定された（瓦吹1991、黒澤1998）。近年行っている市教委の確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と四方を台形状に囲む区画溝が確認され、正倉院であることが確定的になった。

観音堂山地区については、これまで那賀郡衙政府院や河内駅家とする見解もあったが（瓦吹1991、外山1993）、これまでの調査により、寺院伽藍地内及びその周囲から陶製相輪の一部や塑像片、須恵器高环形香炉等の仏教関連遺物の出土をみたことから、いわゆる郡衙周辺寺院であると推定されるに至った（水戸市教育委員会編2005）。創建年代は7世紀後半に遡ると考えられる。

南方地区については、塔跡基壇内部から内黒土器の破片が出土したことから、9世紀後半に造営開始された寺院跡であることが判明した。観音堂山伽藍が9世紀に火災で廃絶していることに加え、南方地区的伽藍区画溝の掘削が中途で廃絶していることから、観音堂山伽藍焼亡後に南方地区において再建が開始されたが、何らかの事情により途絶した可能性が高い（水戸市教育委員会編2005）。

二つの寺院伽藍の東方では、堅穴建物跡や溝跡から湖西産や上野系等搬入品とみられる須恵器や東北地方の栗開式の影響を受けた土師器坏などを含む7世紀後半～8世紀前半の土器群が集中的に出土している。一部は、寺院区画溝に接して鍛冶工房跡等とともに確認されたことから、観音堂山地区初期寺院の造営に関わったものとみられる（水戸市教育委員会編2007a）。またこれら7世紀後半から8世紀前半にかけての遺構群に近接して、8世紀中葉以降に帰属する3×3間の布掘り縦柱式掘立柱建物跡や軸を同じくする区画溝の発見があった。溝からは「郡厨」銘墨書き土師器有台坏が出土し、官衙ブロックの一部である可能性が高い（水戸市教育委員会編2008aほか）。これら8世紀中葉以降の遺構群の主軸が真北を示す傾向にあるのに対し、これらに先行するとみられる遺構群の軸は、やや北西に振れる傾向にある。8世紀前半代のいずれかを画期と考えたい。

寺院伽藍の南東方では、総地業の礎石建物跡1棟とそれを区画する溝1条が検出され、区画溝の覆土上層からは炭化米がまとめて出土した（水戸市教育委員会編2006b）。隣接する堅穴建物跡からは「備所」銘墨書きをもつ8世紀後半代の須恵器有台坏が出土した。狭小な調査区ゆえに拙速な判断は控えた方が、炭化米や礎石建物跡の存在から類推するならば、租税等を備蓄しておくための別個の官衙ブロックの存在をうかがわせる。

寺院・官衙遺跡の外縁部にあたるアラヤ遺跡第1地点では、7世紀末～8世紀初頭の工房跡等から刀子や砥石などが出土しており、寺院や官衙の造営に関わっていた可能性が高い。また、台渡里遺跡を中心に堀遺跡と対になる位置には、渡里町遺跡が所在する。第5地点では、7世紀末から9世紀中葉までの堅穴建物跡が検出されている。灰釉陶器と瓦が出土した点において、官衙隣接集落としての特徴をよく表している（水戸市教育委員会編2008b）。

那珂川左岸では、砂川遺跡から堅穴建物跡で構成される古代集落が確認された。鉄製品のほか土製紡錘車などの生産用具が出土する。また井戸跡から曲物、櫛、高台付盤などの木製品の出土をみた（渡

辺1981)。また、白石遺跡からは、古代掘立柱建物跡、建物基壇が検出され、官衙関連遺跡として注目された。とくに、8世紀前半に帰属するとみられる桁行36間×梁間2間の規模をもつ掘立柱建物跡は、並行する区画溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。(財団法人茨城県教育財團1993)。白石遺跡に隣接する田谷廃寺跡では、台渡里廃寺跡長者山地区と同様の瓦の出土が多数みられ、3棟の礎石建物跡の存在が報告されている(伊東1975)。本遺跡を新置の河内駅家跡とするならば(黒澤1998)、白石遺跡Ⅱ区2号掘立柱建物跡は、駅馬を繋いでおくための馬房や厩舎などの施設であろうか(樋村1993)。なお、この建物跡を馬房とする見解については、「延喜式」には駅馬数が2疋とあり、養老2年(718)の石城国設置に伴って駅馬数10疋が置かれたと仮定しても、建物の規模とには隔たりがあることから、近年では、騎兵のための馬房としてみてることで駅家の軍事的側面を強調した見解が示されている(木本2008)。

**中世～近世** 長者山城跡は、春秋氏の居城と伝えられるが憶測の域を出ず、これまで縄張り図などの作成はあったが、十分な調査成果が蓄積してきたとはい難い。ただし近年の調査では、現在遺る土壘・堀の外側で、15世紀後半～16世紀初頭の土器群の出土する地下式坑や井戸跡、土坑・ピット多数が検出され、少しずつ中世城館の構造を明らかにし得る資料が蓄積されつつある。

とくに、台渡里廃寺跡観音堂山地区では、わずかに遺る土壘に沿う形で古代寺院建物の礎石を落とし込んだ溝跡が確認され、カワラケや内耳土器などが出土した。これらのことから、古代寺院の伽藍地が城館の一角として機能していたと推定され、長者山城跡に関連する遺構群は、かなり広範囲に展開していることが明らかとなった。他方、南方地区では古代塔跡基壇を塚として再利用している様子がうかがえ、五輪塔部材や板碑片、北宋銭を伴う中世火葬墓が集中して営まれていたことが明らかとなった(水戸市教育委員会編2005)。

城館と同時期の遺構としては、台渡里廃寺跡長者山地区やアラヤ遺跡の範囲内の各所で瓦礫道が検出され、城館との関係が注目される。さらに長者山城主の菩提寺と伝わる勝幢寺の近傍である渡里町遺跡第5地点でも、中世後期の土坑(地下式坑含む)が検出され、城館と寺院の関係性について今後の調査に期待がかかる(水戸市教育委員会編2008b)。

台渡里第25次調査では、2区から拳大の円碟による集石遺構が検出され、17世紀前半の瀬戸・美濃や波佐見碗、17世紀後半の瀬戸・美濃大鉢、18世紀前半の肥前系磁器碗が出土した。また4区では、攪乱土中から、カワラケとともに益子土瓶や土人形が出土しており(水戸市教育委員会編2006a)、17世紀前半頃には近世村落の形成があったものとみられる。

(松浦)

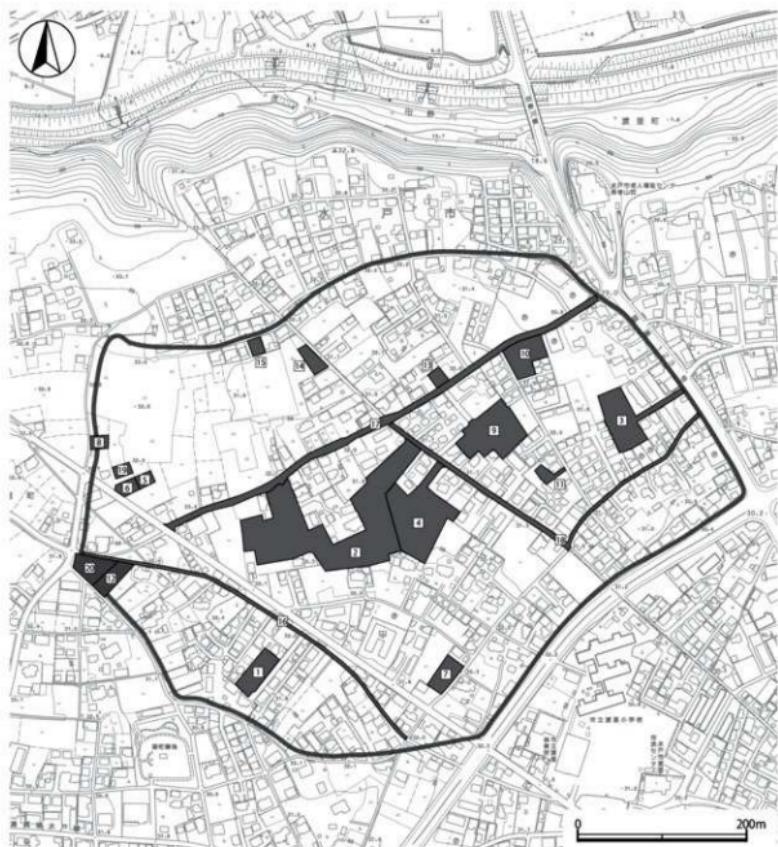
### 2-3 堀遺跡における既往の調査

堀遺跡においては、平成21年12月1日現在で、これまで20地点において39次にわたる発掘調査が行われている(第2表・第3図)。その内訳は、試掘調査27件、本発掘調査10件、確認調査1件、工事立会調査1件である。それらの中には現在、室内整理作業中の調査も含まれていることから、網羅的に記すのではなく、既往の調査で注目されるべき内容を中心に概観したい。

当遺跡で確認されている遺構の中で最も古いものは、第2地点において確認された堅穴建物跡1軒である。十王台式土器の範疇で理解される弥生時代後期の壺と土師器の壺及び壺が共伴して出土して

おり（水戸市堀遺跡発掘調査会編 1995），古墳時代前期初頭に帰属するものと理解される。第2地点において主体をなすのは、竪穴建物跡・掘立柱建物跡から構成される大規模な古代集落跡である。集落の隆盛は8世紀後半から9世紀にかけてであるが、特筆される遺物として、刀子・鎌・鎌・釣針・釘・くるる鉤などの鉄製品や須恵器壺Gなどの特殊な器種の土器が挙げられる。また、土坑内からは人面墨描の土師器小甕も出土しており、堀遺跡の特異性を物語る遺物といえる（水戸市堀遺跡発掘調査会編前掲）。

第2地点で確認された5号掘立柱建物跡は、長舎のような公的建物である可能性が指摘されたが（樋村 2005）。第18地点の調査によって、掘立柱塀（欄列）の可能性が高いことが判明した（水戸市教



第3図 堀遺跡における既往の調査地点

育委員会編 2009c)。こうした区画施設は、第2地点の北側に隣接する第9地点の調査においても、掘立柱塀（柵列）が確認されている（水戸市教育委員会編 2009a）。

こうした区画施設や掘立柱建物跡は、部分的な検出や1棟のみの確認にとどまっているため、規模や展開も含めて不明な部分が多く、集落全体の中でどのように位置づけるべきか慎重な姿勢が求められるが、堀遺跡が一般的な集落でないことは明白であり、那賀郡衙の造営や修造に深く関わる計画村落である可能性が高い。第4・9・10・11の各地点において、堅穴建物跡を主体として数多くの奈良・平安時代の遺構が確認されており、極めて規模の大きい古代集落跡であることが窺える。

遺跡の西端に位置する第1地点では、9世紀代の堅穴建物跡とともに、規模の異なる3棟の掘立柱建物跡が検出されており（山武考古学研究所編 1994）。当該集落の規模の大きさを物語る。また、第1地点の北方にある第6地点では、廟・孫廟をもつ掘立柱建物跡が検出されており（水戸市教育委員会編 2009a）、その構造や生活空間の外縁部に位置する点から古代村落内の仏堂に該当するとみられる。

以上の状況をまとめると、堀遺跡は古墳時代前期に土地利用が開始され、7世紀後半の台渡里官衙遺跡群の形成とともに大規模な集落遺跡としての土地利用が9世紀後半まで展開する計画村落としての性格を強く帯びた遺跡と言うことができるであろう。（渥美）

第2表 堀遺跡における既往の調査一覧

地点	次数	調査箇所	調査開始日	種別	調査原因	遺構	遺物	参考
1		堀町 828 - 2	平成 5年 11月 15日	本	建完住宅	○	○	伊藤 1995
2		堀町 407 - 60 42か	平成 6年 9月 2日	本	宅地造成	○	○	井上・千葉・櫻村 1995
3	1	渡里町 3237 14か	平成 17年 5月 12日	試	宅地造成	○	○	水戸市教委 2007(第 11集)
	1	渡里町 3237 14か	平成 17年 7月 19日	探	宅地造成	○	○	水戸市教委 2007(第 11集)
	2	渡里町 3231 14か	平成 22年 1月 18日	本	宅地造成	○	○	
		渡里町 3231 - 10	平成 22年 12月 1日	試	個人住宅	○	○	
		渡里町 3231 - 11	平成 24年 11月 6日	試	個人住宅	○	—	
4	1	堀町 428 - 1, 428 - 3428 - 4, 431	平成 13年 6月 4日	試	宅地分譲	○	○	トレンチ 1本
	2	堀町 428 - 8, 436 - 9の一部	平成 18年 2月 6日	試	宅地造成	○	○	水戸市教委 2007(第 11集)
5	1	堀町 428 - 8, 436 - 9の一部	平成 17年 5月 31日	試	宅地分譲	—	○	トレンチ 1本
	2	堀町 381 - 2, 382 - 2	平成 18年 5月 9日	試	個人住宅	—	○	水戸市教委 2008(第 22集)
6	1	堀町 381 - 1 -, 382 - 3	平成 18年 12月 4日	試	個人住宅	—	○	
	2	堀町 381 - 1 -, 382 - 4	平成 19年 3月 12日	本	個人住宅	○	○	
7	1	堀町 500 - 3, 500 - 4	平成 18年 10月 5日	試	宅地造成	—	—	
	2	堀町 295	平成 21年 3月 25日	試	個人住宅	○	○	水戸市教委 2011(第 43集)
9	1	渡里町 3314 14か	平成 19年 2月 26日	試	宅地造成	○	○	
	2	渡里町 3314 14か	平成 19年 7月 23日	本	宅地造成	○	○	水戸市教委 2008(第 19集)
	1,1 (区画No.1)	渡里町 3309 - 9	平成 20年 7月 17日	試	個人住宅	○	○	
	2,1 (区画No.2)	渡里町 3309 - 10	平成 21年 2月 4日	試	個人住宅	○	○	
	3,1 (区画No.3)	渡里町 3316 - 6, 3317 - 1	平成 20年 4月 9日	本	個人住宅	○	○	
	4,1 (区画No.4)	渡里町 3309 - 3	平成 20年 12月 22日	試	個人住宅	—	○	
	5,1 (区画No.5)	渡里町 3309 - 8	平成 20年 10月 21日	試	個人住宅	○	○	
	6,1 (区画No.6)	渡里町 3309 - 4	平成 21年 2月 4日	試	個人住宅	○	○	
	7,1 (区画No.7)	渡里町 3309 - 7	平成 20年 4月 14日	試	個人住宅	○	○	
	7,2 (区画No.7)	渡里町 3309 - 7	平成 21年 1月 31日	本	個人住宅	○	○	
	8,1 (区画No.8)	渡里町 3309 - 2	平成 20年 3月 4日	試	個人住宅	○	○	
	9,1 (区画No.9)	渡里町 3309 - 1	平成 21年 12月 15日	試	個人住宅	○	○	
	9,2 (区画No.9)	渡里町 3309 - 1	平成 22年 1月 19日	本	個人住宅	○	○	

	10_1 (区画No 10)	渡里町3314 - 5	平成 21 年 7 月 13 日	試	個人住宅	○	○	
9	10_2 (区画No 10)	渡里町3314 - 5	平成 21 年 7 月 21 日	本	個人住宅	○	○	
	11_1 (区画No 11)	渡里町3314 - 4	平成 21 年 8 月 24 日	試	個人住宅	○	○	
	12_1 (区画No 12)	渡里町3314 - 2	平成 20 年 4 月 14 日	試	個人住宅	—	○	
10		渡里町3217 - 1, 3217 - 6	平成 19 年 3 月 26 日	試	個人住宅	○	○	
11		渡里町3294 - 1, 3295 - 1	平成 19 年 6 月 15 日	試	個人住宅	○	○	水戸市教委 2010 (第 35 集)
12		棚町 306 - 1 は小	平成 20 年 1 月 29 日	試	宅地分譲	○	○	水戸市教委 2010 (第 35 集)
13		渡里町3323 - 1 の一部	平成 20 年 4 月 9 日	試	個人住宅	○	○	水戸市教委 2011 (第 43 集)
14		棚町 381 - 1, 382 - 3	平成 21 年 4 月 27 日	試	個人住宅	○	○	
15		棚町 327 - 1	平成 20 年 7 月 13 日	試	個人住宅	○	○	水戸市教委 2011 (第 43 集)
		棚町 327 - 4	平成 20 年 10 月 28 日	立	個人住宅	—	—	浄化槽設置の立会
16	1	棚町 397 先～ 529 - 3 先	平成 21 年 9 月 7 日	本	公共下水	○	○	
	2	棚町 828 - 1 先～ 838 - 2 先	平成 22 年 4 月 12 日	本	公共下水	○	○	
17		渡里町3309 - 2 先～ 棚町400 - 3 先	平成 21 年 11 月 2 日	本	公共下水	○	○	
18		棚町 424 - 5 先～ 450 - 1 先, 渡里町 3241 - 5 先～ 3290 - 1 先	平成 21 年 10 月 5 日	本	公共下水	○	○	

## 第3章 調査の方法と成果

### 3-1 調査の方法

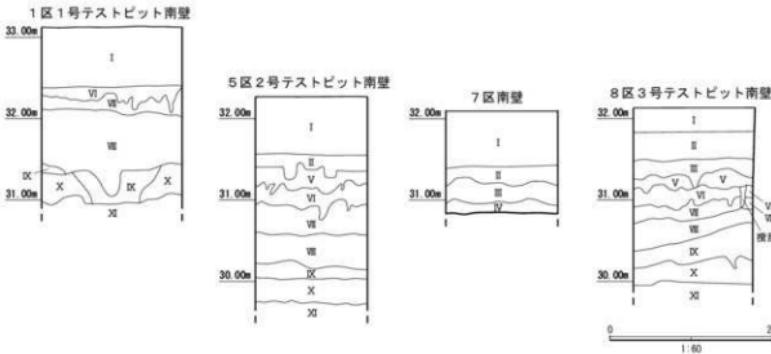
調査区の座標は公共座標を基準に設定した。調査対象地は幅8.0mほどの南北に延びる片側1車線の道路である。車両や周辺住民の通行を確保するために9ヶ所にわたって調査区を設定し、南から北に向かって1~9区と呼称するとともに、車両および歩行者通行スペースを除いた幅約20mの部分について、順次、発掘調査を実施した。調査総面積は264.55m<sup>2</sup>を測るが、調査区はいずれも狭小なことから、実際の作業には大きな制約が伴うことになった。

調査にあたっては、重機を用いて道路路盤と碎石層を撤去し、表土を除去後、主として人力で遺構確認面までの掘り下げを行った。包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて主要なものを3次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ(1280万画素)を併用し、適宜、記録撮影を行った。(林)

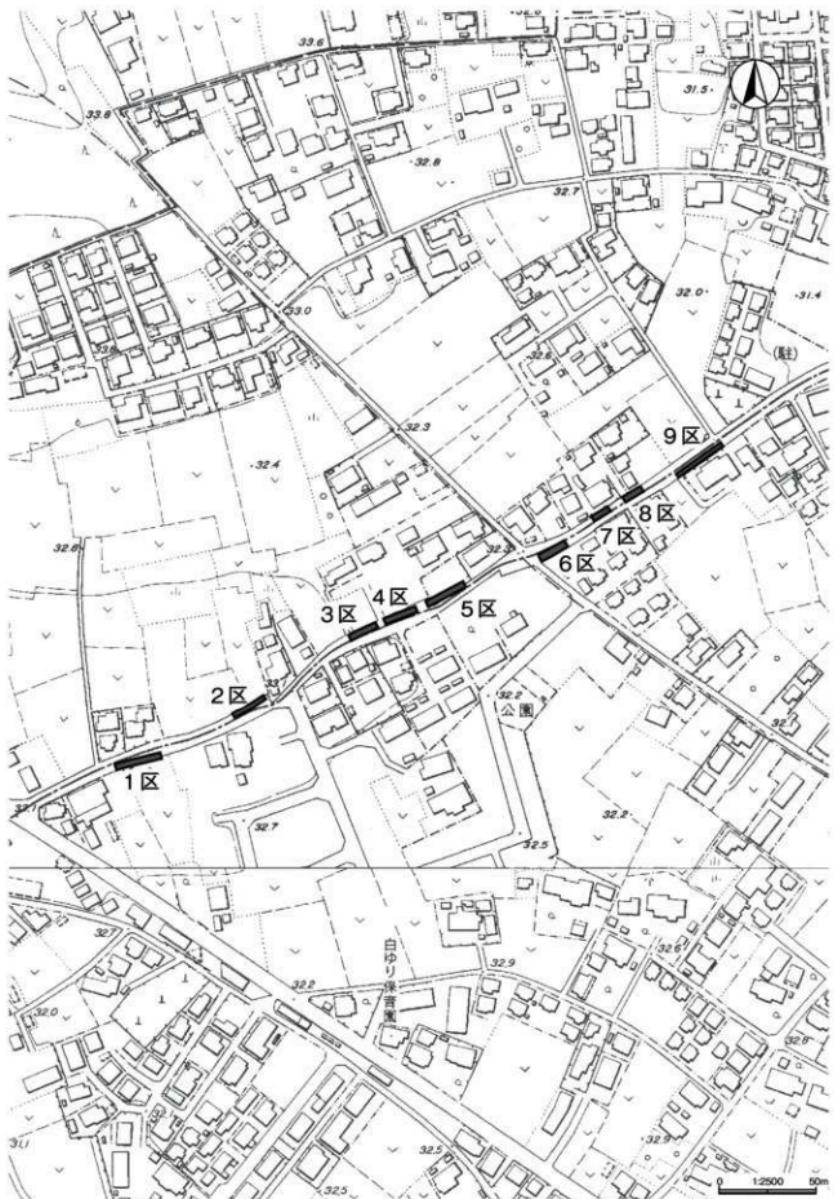
### 3-2 基本土層

1区東側、5区西側、8区西側の3ヶ所において基本土層確認のためのテストピットを深く設け、土層観察を行った。基本土層の概要は以下の通りである。

- I 層 碎石・底土層
  - II 層 近世の耕作土層
  - III 層 10YR2/3 黒褐色土層 ローム粒を少量含む。粘性をもち、縮まる。
  - IV 層 10YR3/4 暗褐色土層 ローム粒を少量含む。粘性をもち、縮まる。
  - V 層 七本桜軽石層
  - VI 層 今市軽石層
  - VII 层 10YR6/8 明褐色ローム層 赤・黒色スコリアを少量含む。粘性をもち、硬く縮まる。
  - VIII 层 10YR5/8 黄褐色ローム層 黒色スコリアを少量含む。粘性をもち、縮まる。
  - IX 层 10YR5/8 黄褐色ローム層 粘土・鹿沼軽石粒を少量含む。粘性をもち、やや縮まる。
  - X 层 鹿沼軽石層
  - XI 层 10YR5/8 黄褐色ローム層 粘土・鹿沼軽石粒を少量含む。粘性をもち、縮まる。
- (林)

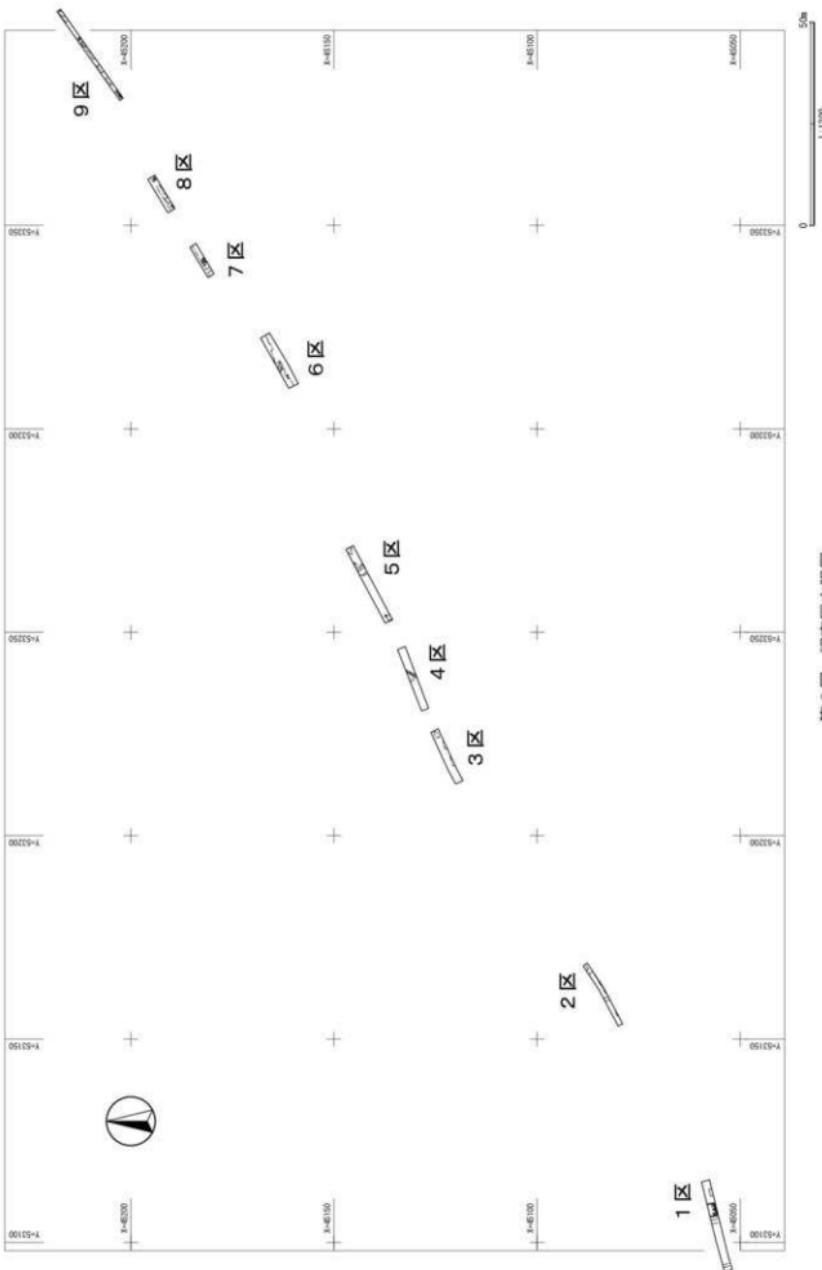


第4図 基本土層図



第5図 調査区の位置

第6図 調査区方眼図



### 3-3 遺構

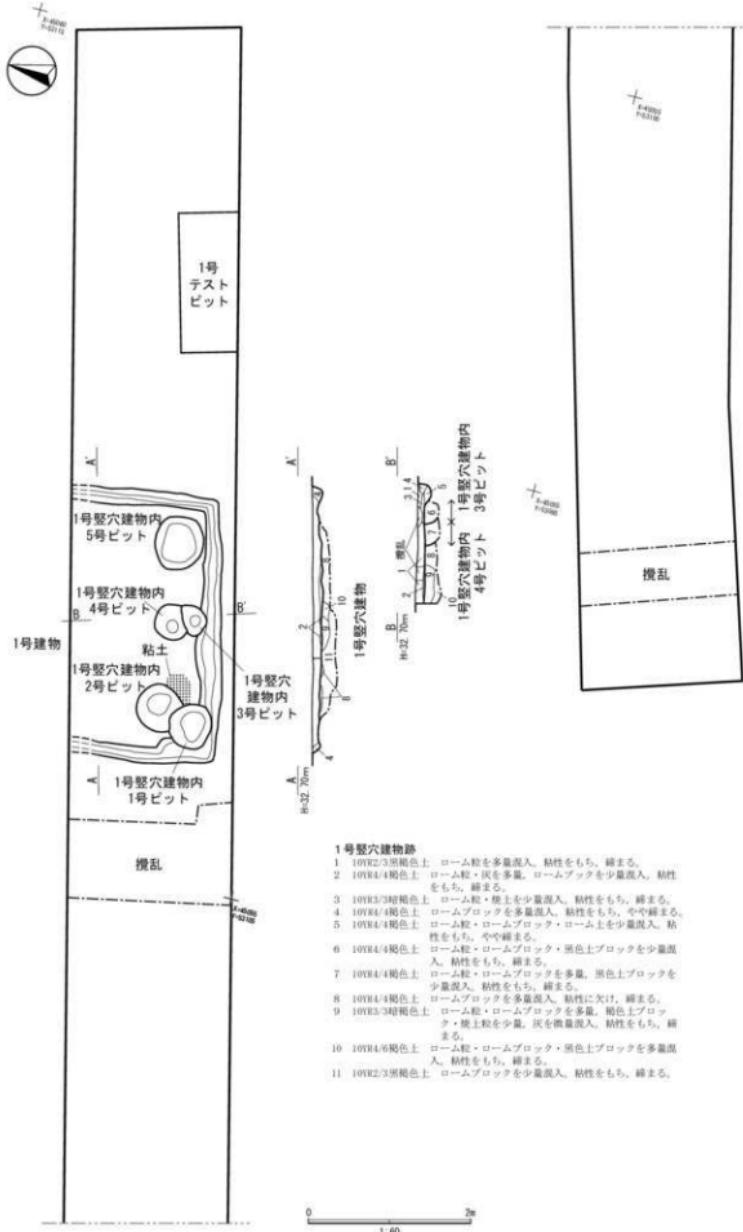
1~9区より検出された遺構の内訳は、竪穴建物跡1軒、溝3条、土坑1基、ピット15基である。以下、調査区ごとに検出された遺構について述べる。なお、ピットの多くはII層中より掘り込まれており、大部分が中世~近世の所産であったと考えられる。規則的な配列状態を示すものや性格の明らかなものは認められないため、詳細については第3表のピット一覧を参照されたい。

#### (1) 1区の遺構

長さ約228m、幅約20mの東西に細長い調査区である。調査区の中央部および西側に水道管が埋設されていたことから、この部分については調査を行うことができなかった。確認面であるVI層上面までの深さは0.7~0.8mに達した。II~V層は攢乱のためにほとんど残存していない。

遺構は、調査区の東側から竪穴建物跡1軒が検出された。

**1号竪穴建物跡** 1区の東側に位置する。上面を削平されており、確認面はVI層上面である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈するものと思われるが、南半部が確認されただけであり、全体の規模は不明である。確認部分の東西の径は約336cm、南北の径は約190cm以上を測る。確認部分の長軸方向はN-11°-Wを示す。壁は比較的急角度で掘り込まれているが、最大壁高は約12cmにとどまる。褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが、堅緻である。周溝は確認部分を全周する。幅約9~32cm、深さ約10cmを測る。建物内より合計5基のピットが検出された。径約41~70cm、深さ約13~24cmを測る。南壁中央の3・4号ピットは出入口施設、断面鍋底状を呈する1号ピットは貯蔵穴であった可能性が考えられる。性格ははつきりしないが、2号ピットの東側床面には粘土が堆積していた。掘り方は部分的であり、壁際には認められなかった。全体的に起伏をもち、床面からの深さは最大約18cmを測る。カマドは確認部分からは検出されなかった。遺物は須恵器片22点、土師器片122点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して9世紀代の所産であった可能性が高い。



第7図 1区遺構図



第8図 2区遺構図

#### (2) 2区の遺構

長さ約 17.2 m、幅約 1.2m の北東から南西に細長い調査区である。調査区の中央部と東側に水道管が埋設されていたことから、この部分については調査を行うことができなかつた。確認面であるVI層上面までの深さは約 0.8 m に達した。II～V 層は擾乱のためほぼ残存していない。

近・現代の芋穴状土坑 1 基のみ確認された。

#### (3) 3区の遺構

長さ約 14.1 m、幅約 2.0m の北東から南西に細長い調査区である。調査区の各所に水道管が埋設されていたことから、この部分については調査未調査である。確認面であるVI層上面までの深さは約 0.6 m に達した。II～V 層は擾乱のためほぼ残存していない。

近・現代の芋穴状土坑 1 基のみ確認された。

#### (4) 4区の遺構

長さ約 16.2 m、幅約 1.8～2.0m の北東から南西に細長い調査区である。確認面であるVI層上面までの深さは約 0.8～1.0 m に達した。II～V 層は擾乱のためほぼ残存していない。

遺構は、調査区の中央部から溝 1 条が検出された。

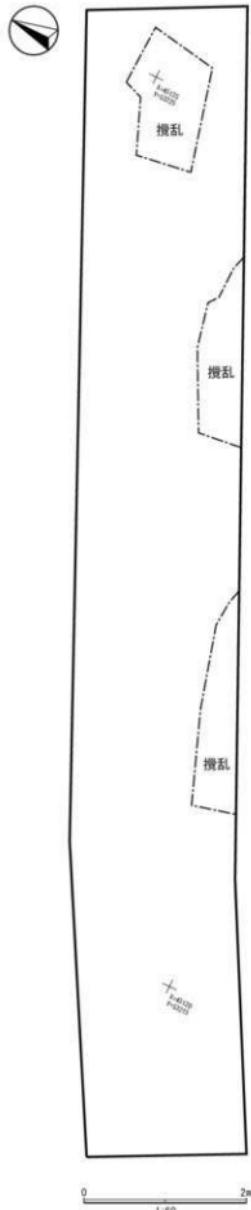
3号溝 4区の中央部に位置する。上面大部分を削平されている。掘り込み面はIII層上面である。調査区を北東方向から南西方向に延びるが、両端が調査区域外であり、全容は不明である。確認部分の全長は約 3.1 m 以上、上幅約 0.6 m、底幅約 0.2 m、深さ約 31 cm を測る。長軸方向は N-26°-E を示す。断面は開いた U 字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は約 31.1 m を測る。遺物の出土はないが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

#### (5) 5区の遺構

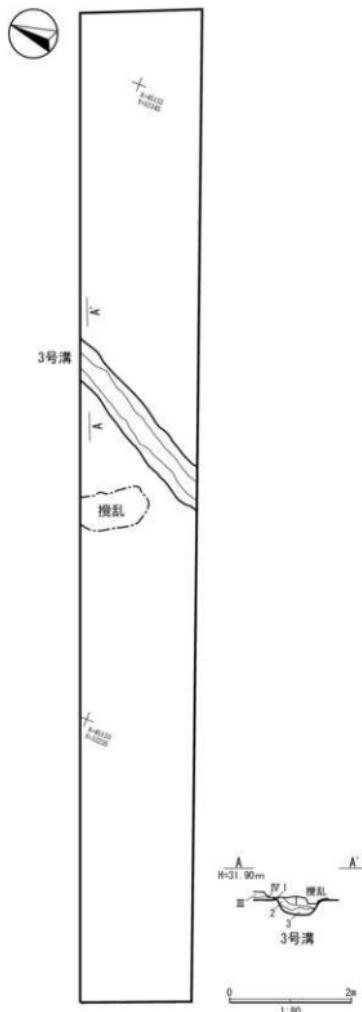
長さ約 22.6 m、幅約 2.0m の北東から南西に細長い調査区である。確認面であるV層上面までの深さは約 0.7～1.0 m に達した。III・IV 層は擾乱のためほぼ残存していない。

遺構は、調査区西端近くからビット 1 基が検出された。

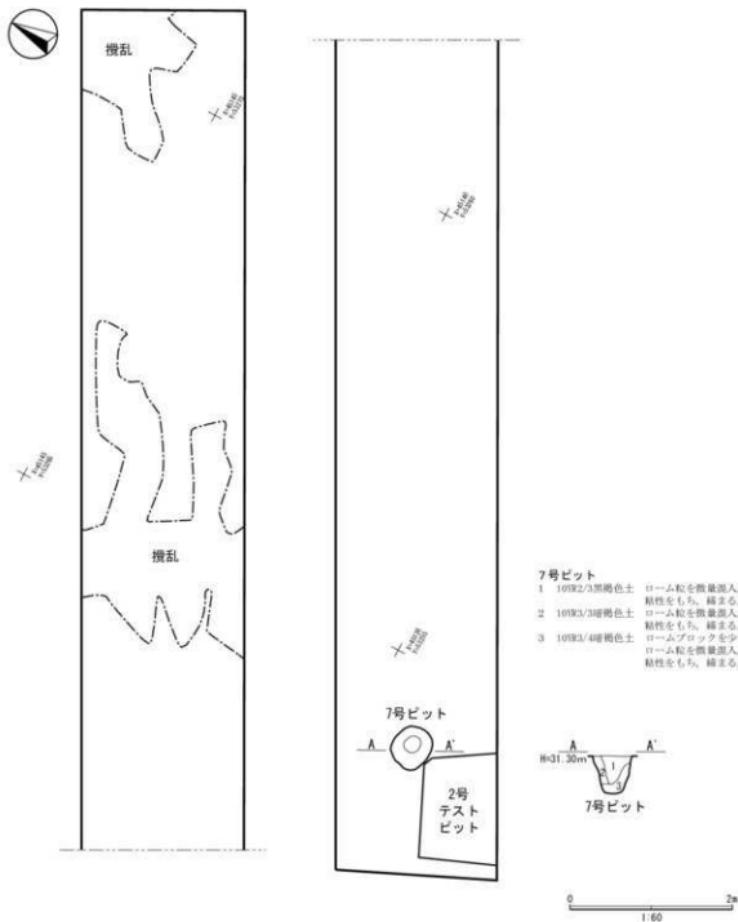
7号ビット 5区の西側に単独で位置する。径約 48 cm、深さ約 47 cm を測る。遺物の出土はないが、覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が高い。



第9図 3区遺構図



第10図 4区遺構図



第 11 図 5 区遺構図

#### (6) 6 区の遺構

長さ約 14.3 m、幅約 2.5 ~ 2.8m の北東から南西に細長い調査区である。調査区の南側に水道管が埋設されていたことから、この部分については未調査である。確認面であるⅣ層上面までの深さは、約 0.8 ~ 1.0 m である。Ⅱ・Ⅲ層は擾乱のためほぼ残存していない。

遺構は、調査区の中央部西寄りから溝 1 条とピット 1 基が検出された。

**4号溝** 6区の中央部西寄りに位置する。上面大部分を削平されているが、掘り込み面はⅢ層上面である。調査区を東西に延びるが、両端が調査区域外で、全容は不明である。確認部分の全長は約20.0m、上幅約0.9m、底幅約0.4m、深さ約55cmを測る。長軸方向はN-87°-Wを示す。断面は開いたU字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は30.9mを測る。遺物の出土はないが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代の所産であった可能性が高い。

**8号ピット** 4号溝と接するように単独で分布する。径約37cm、深さ約32cmを測る。遺物の出土はなかったが、覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が高い。

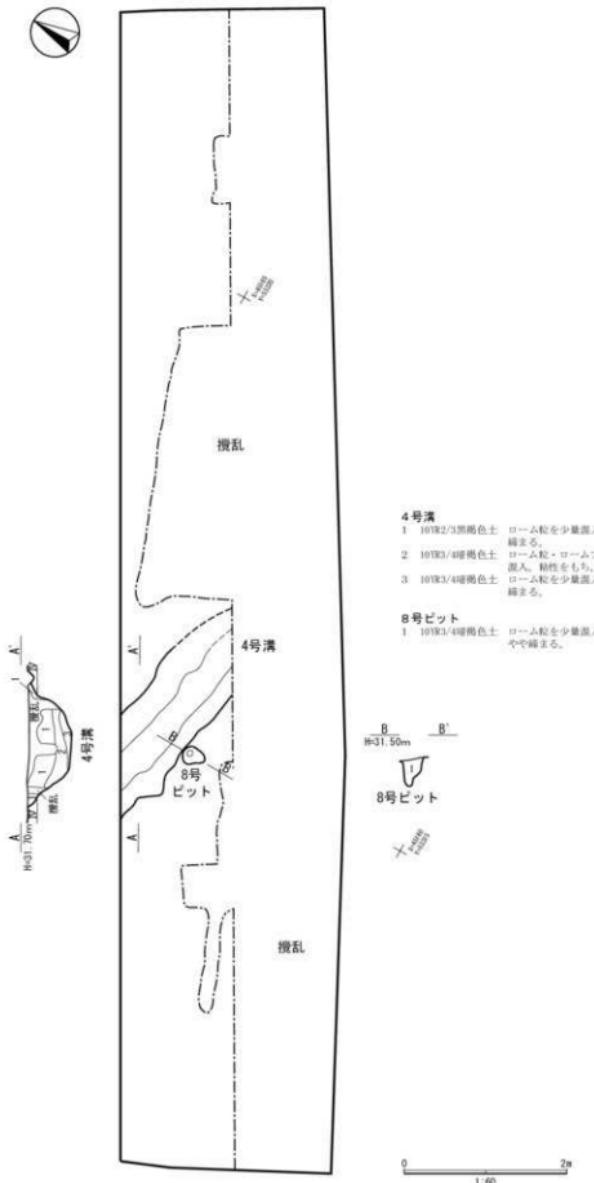
#### (7) 7区の遺構

長さ約8.6m、幅約1.8～19mの北東から南西に細長い調査区である。調査区の北側および西側に水道管が埋設されていたことから、この部分については調査を行うことができなかつた。Ⅲ層上面までの深さは約0.9～1.0mに達した。

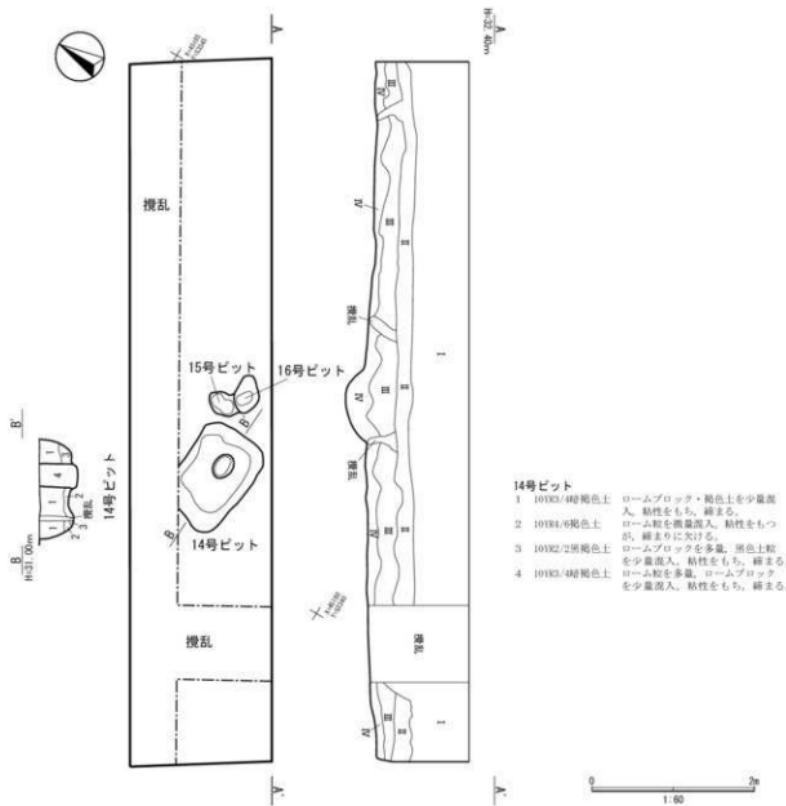
遺構は、調査区の中央部からピット3基が検出された。

**14号ピット** 7区の中央部に単独で位置する。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は隅丸長方形を呈する。確認部分の長軸は約126cm、短軸は約85cm、深さは約42cmを測る。長軸方向はN-81°-Wを示す。断面形は角の丸い箱状を呈し、底面は起伏をもつ。中央やや東側に柱痕と考えられるピットが検出された。長径約32cm、短径約23cm、の楕円形を呈し、断面形は円筒状を呈する。底面に圧痕などの痕跡は確認できなかつた。遺物は須恵器2点、土師器5点が出土している。遺構の形状、覆土のあり方などから判断して9世紀代の所産であろう。掘立柱建物跡を構成するピットの可能性が高い。

**ピット** 調査区の中央部より14号ピットと近接して2基(15・16号)のピットが検出された。径約32～45cm、深さ約42～51cmを測る。遺物の出土はなかつたが、覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が高い。



第12図 6区遺構図



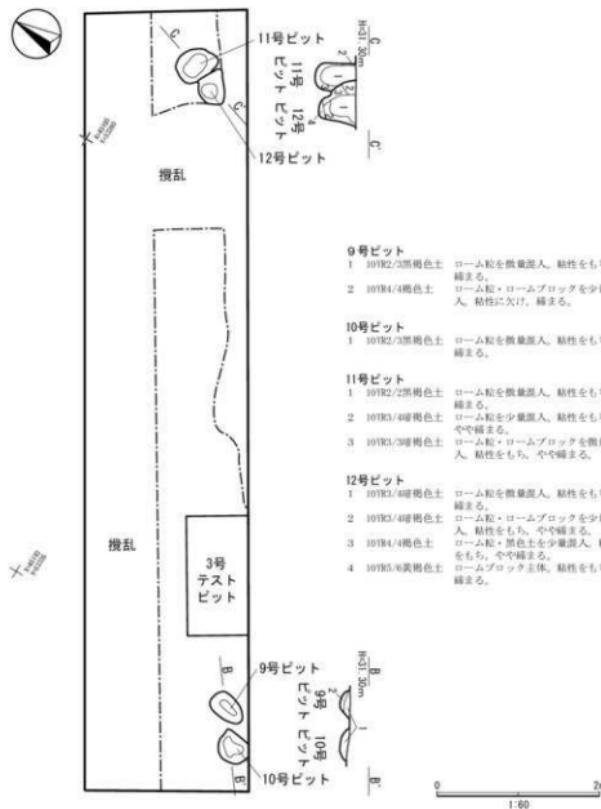
第13図 7区遺構図

#### (8) 8区の遺構

長さ約9.5m、幅約2.0mの北東から南西に細長い調査区である。北側を中心に水道管が埋設されていたことから、この部分については調査を行うことができなかった。Ⅲ層上面までの深さは約0.7～0.8mに達した。

遺構は、調査区の東端と西端からピット4基が検出された。

**ピット** 調査区の東端から2基(11・12号)、西端から2基(9・10号)、合計4基のピットが検出された。径約40～56cm、深さ約15～52cmを測る。遺物は、12号ピットより須恵器2点が出土している。覆土のあり方などから判断して中世～近世の所産であった可能性が高い。



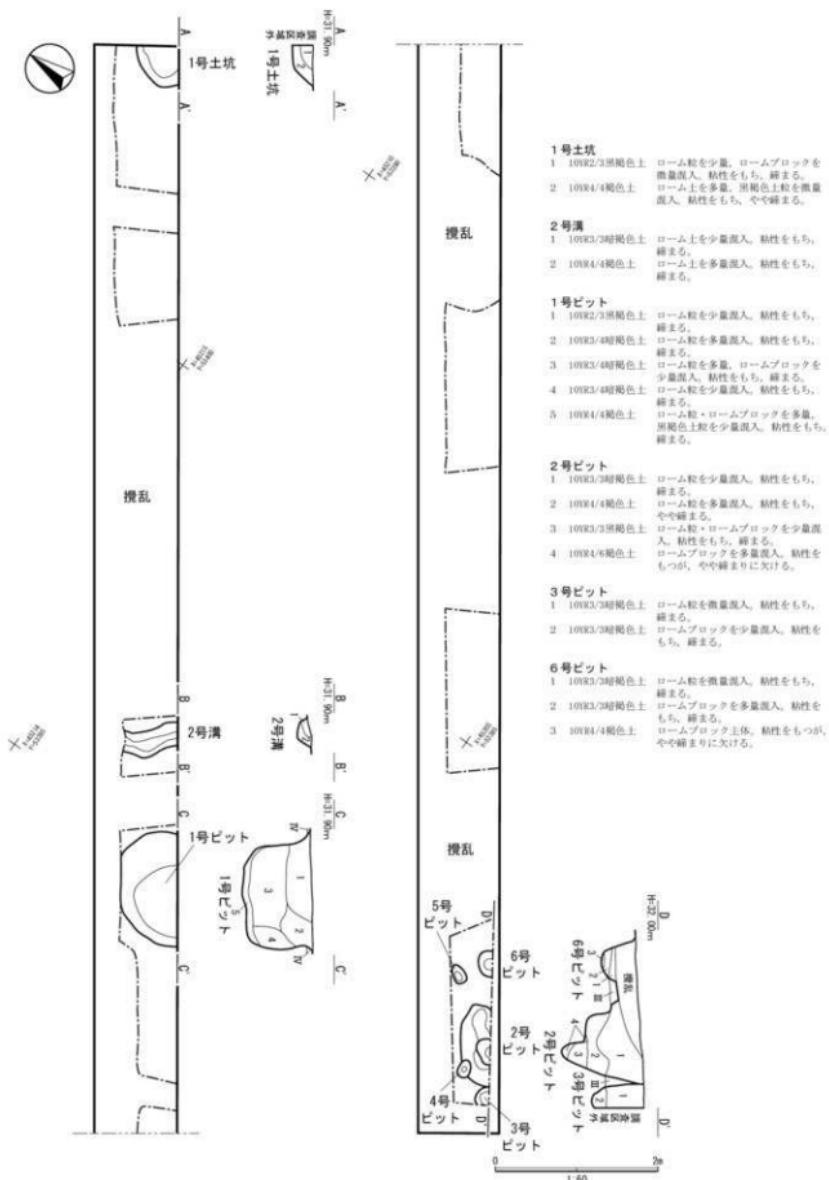
第14図 8区遺構図

### (9) 9区の遺構

長さ約27.0m、幅約1.0mの北東から南西に細長い調査区である。北側を中心に水道管が埋設されていたことから、この部分については調査を行うことができなかった。確認面であるVI層上面までの深さは約0.7~1.1mに達した。

遺構は、調査区の東端から土坑1基、東側から溝1条、中央部東寄りと西端からピット6基が検出された。

**1号土坑** 9区の東端に位置する。遺構の約半分が調査区外である。確認面はVI層上面で、平面形は円形ないし椭円形を呈するものと思われるが、全容は不明である。確認部分の長軸は約54cm以上、



第15図 9区遺構図

深さ約26cmを測る。確認部分での長軸方向はN-25°-Eを示す。断面形は鍋底状を呈し、底面はやや丸みをもつ。遺物の出土はなかったが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して中世以降の所産であった可能性が高い。

**2号溝** 9区の中央部東寄りに位置する。確認面はVI層上面である。調査区を北西方向から南東方向に走るが、両端が攪乱と調査区域外で、全容は不明である。確認部分の全長は約0.6m、上幅約0.3m、底幅約0.2m、深さ約16cmを測る。長軸方向はN-43°-Wを示す。断面は開いたU字状を呈する。確認範囲は限られるが、底面の標高は約31.5mを測る。遺物の出土はないが、遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が高い。

**1号ピット** 9区の中央部に位置する。確認面はVI層上面である。南東側が調査区外で、その部分は調査できなかった。平面形は推定円形を呈し、径は約141cm、深さは約82cmを測る。断面形は袋状を呈する。底面はやや起状をもつ。遺物は須恵器が2点、土師器1点が出土している。出土遺物や覆土のあり方などから古代期の柱穴であった可能性が高い。

**2号ピット** 9区の南西端に位置する。確認面はVI層上面である。南東側が調査区外で、その部分は調査できなかった。平面形は推定楕円形を呈し、確認部分の径は長軸約84cm、短軸約34cm、深さは約96cmを測る。断面形は有段の逆円錐形状である。遺物は、土師器が1点出土している。出土遺物や覆土のあり方などから、古代期の柱穴であった可能性が高い。切り合い関係は、3・4号ピットに先行する。

**ピット群** 9区の南西端に4基（3～6号ピット）検出された。径は約22～34cm、深さは約11～33cmを測る。遺物は出土していない。遺構の形状や覆土のあり方などから、中世～近世の所産であった可能性が高い。3・4号ピットは2号ピットに後続する。  
(林)

第3表 ピット一覧

遺構番号	調査区	平面形態	規模 長径 (cm)	規模 短径 (cm)	断面形態	確認標高 (m)	確認面からの 深さ (cm)	出土遺物
1号ピット	9	推定円形	(141)	-	袋状	31.5	82	須恵器・ 土師器
2号ピット	9	推定楕円形	(84)	34	有段逆円錐形状	31.8	96	土師器
3号ピット	9	推定円形	(24)	-	筒状	31.8	17	
4号ピット	9	楕円形	22	14	筒状	31.8	12	
5号ピット	9	楕円形	24	16	逆円錐形状	31.8	33	
6号ピット	9	推定楕円形	(34)	(14)	筒状	31.8	11	
7号ピット	5	円形	48	-	逆円錐形状	31.2	47	
8号ピット	6	不整楕円形	37	23	有段逆円錐形状	31.2	32	
9号ピット	8	楕円形	48	28	筒状	31.1	15	
10号ピット	8	円形	40	-	筒状	31.1	16	
11号ピット	8	不整円形	56	40	筒状	31.1	52	
12号ピット	8	不整円形	40	38	筒状	31.1	48	須恵器
13号ピット	欠番							
14号ピット	7	隅丸長方形	126	85	箱状	30.7	42	須恵器・ 土師器
15号ピット	7	楕円形	39	26	逆円錐形状	30.8	51	
16号ピット	7	不整楕円形	45	43	逆円錐形状	30.8	50	

### 3-4 遺物

今回の調査地点からは須恵器、土師器、古代瓦、陶器などが遺物収納箱にして1箱分、200点、2,829.8 gが出土した。主体となるのは奈良・平安時代の須恵器と土師器、特に土師器であり、須恵器の48点、850.9 g、土師器の140点、999.6 gをあわせると、点数比で出土遺物全体の94%、重量比で全体の65%に達するが、それ以外の遺物の出土はきわめて少なく、瓦類は6点、929.2 g、陶器類は6点、50.1 gにとどまる。調査区別では1号堅穴建物跡が分布する1区出土遺物がもっとも多く、151点、1,143.0 gを数える。2・4・8区からの遺物の出土はまったくみられなかった。

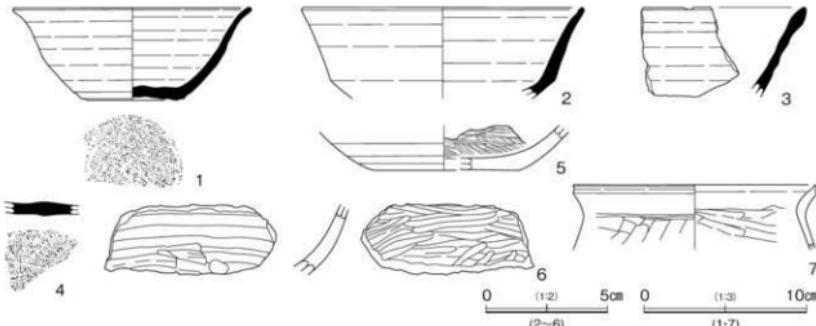
**土器** 須恵器は壺、高台付壺・盤類、長頸壺、甕、蓋が出土している。主体を占めるのは壺類であり、甕類がこれに次ぐ。遺構別では22点、200.1 gと1号堅穴建物跡からの出土が目立つ。1・2・4は木葉下窓跡群産の壺である。1の底部には文字種不明のヘラ書きが残されている。細片のため、器種は不明確であるが、文字種不明のヘラ書きは4の底部にも認められる。7区出土の13は口縁部を欠くが、高台付盤と思われる。時間的には2が8世紀中葉～後葉、1が9世紀後葉、3が9世紀代に比定される。

もっとも出土量の多い土師器は壺、甕である。122点、874.8 gと1号堅穴建物跡からの出土例が大部分を占める。5はいわゆる内黒壺で、体部下端から底部にかけてコゲ状の付着物が認められる。6は外面に火拂痕をもつ壺の体部破片である。7～10は常総型甕である。時間的には8世紀後葉以降に比定されるものが多い。

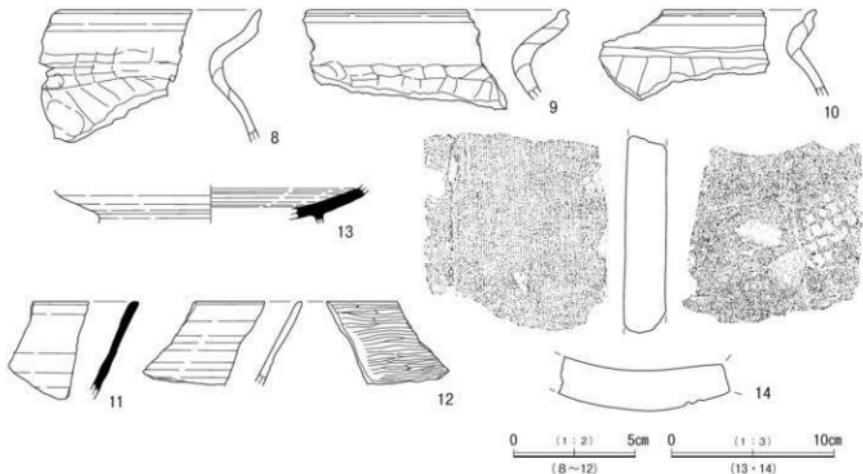
陶器は碗、皿、蓋などが出土している。いずれも中・近世の所産と思われるが、器種不明を含めても6点と少なく、細片がほとんどであったことから、図示するまでには至らなかった。

**瓦** 平瓦4点、丸瓦1点、瓦種不明1点の合計6点が出土している。7区出土の14は一枚造りの平瓦、凸面調整は正格子目状叩き後ヘラケズリ、凹面調整は布目が施されている。平瓦の凸面調整には、この他、ケズリ調整、ナデ調整などがみられる。丸瓦の調整は不明である。時間的には格子叩きが残ることから、8世紀前葉～中葉に収まるものとみられる。いずれにせよ、近傍の古渡里廃寺跡で所用され廃棄されたものと考えられ、その時期より新しい8世紀後葉～9世紀代の間であると推定できよう。

(林)



第16図 出土遺物(1)



第17図 出土遺物(2)

第4表 出出土器属性一覧

固編 番号	出土 地点	通稱名	種別	器種	保存 部位	残存 率(%)	口径 (推定 口徑) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	高さ (推定 高さ) (cm)	特徴・手法	施土	海綿 骨針	色調	備考
1	1区	1号竪穴 建物跡 ピット内	須恵器	环	口縁部 体部	50	(14.6)	(6.2)	(5.7)	G縫隙外反、ココナデ、体部中内 面ナギ、外面下端内側ヘタケズリ、 底部内側ヘタケズリ後未調整。	白色粒子・砂粒 多量、チャート 少量	○	良好	内外高：5.5Y1/ 灰黑色 木星下深納群産。
2	1区	1号竪穴 建物跡 ピット内	須恵器	环	口縁部 ～ 体部	30	(11.6)	—	(3.7)	二次縫合部造り、西面内に立ち 上がる。口縁部ヨコナデ、体部内 外面ナギ。	砂粒多量 白色粒子・チャート 少量	○	良好	内外高：5.5Y1/ 灰黑色 木星下深納群産。
3	1区	1号竪穴 建物跡	須恵器	环	口縁部 体部	10	—	—	—	直縫部内に立ち上がる。口縁部肥厚、 ロクナデ形成。 口縁部ヨコナデ、体部内外面ロク ナデ。	白色粒子多量 砂粒少額	良好	10YR5/4 に近い黄褐色	底部文字種不明 のヘタ書き。
4	1区	1号竪穴 建物跡 ピット内	須恵器	环丸	底部	細所	—	—	—	底部削除へたり後未調整。	チャート多量、 砂粒少量	良好	内外高：5.5Y1/ 灰黑色	底部文字種不明 のヘタ書き。 木星下深納群産。
5	1区	1号竪穴 建物跡	土師器	环	体部下～ 底部	30	—	(6.0)	(1.8)	体部にくらみを持つ。体部：外面 縫隙外反ヘタケズリ、下端内側ヘタ ケズリ。内面多方斜形引丁等ナギ キ。底部：削除へたり後未調整。	砂粒少量、長石 微量	良好	内面：12Z/ 内面：灰黑色、体部下 端～底面にコゲ 状の付着物。	
6	1区	1号竪穴 建物跡	土師器	环	体部下位	30	—	—	—	体部にくらみを持つ。外面ナギ、 内面ヘタマガ半手等ナギ。	白色粒子多量 砂粒、チャート 少量	○	良好	内面：10YR5/6 明赤褐色 外面：灰褐色 表面に火燐痕あ る。
7	1区	1号竪穴 建物跡 ピット内	土師器	環	口縁部 ～胸部	10	(15.0)	—	(4.0)	口縁部上方につまみ出される。口 縁部ヨコナデ、胸部外側ヘタケズ リ後ナギ。内面粗鈍なナギ。	白色粒子多量、 長石少量	良好	内面高： 10YR4/6 褐色	壺型壺
8	1区	1号竪穴 建物跡 ピット内	土師器	環	口縁部 ～胸部	10	—	—	—	口縁部上方につまみ出される。口 縁部ヨコナデ、胸部外側ヘタケズ リ後ナギ。内面粗鈍なナギ。	白色粒子多量・ 砂粒、チャート 少量、長石微量	良好	内面：10YR3/3 灰褐色 外面：10YR4/4 に近い赤褐色	壺型壺
9	1区	1号竪穴 建物跡	土師器	環	口縁部 ～ 胸部上端	10	—	—	—	口縁部上方につまみ出される。口 縁部ヨコナデ。胸部内面ナギ。	白色粒子・砂粒 多量、長石少量	良好	内外高： 10YR4/4 褐色	壺型壺
10	1区	1号竪穴 建物跡	土師器	環	口縁部 ～ 胸部上端	5	—	—	—	口縫部外側につまみ出される。口 縫部ヨコナデ。胸部内側ヘタケズ リ後ナギ。内面ナギ。	白色粒子多量 砂粒多量	良好	内面高： 10YR5/6 明赤褐色 外面：5.5YR4/8 赤褐色	壺型壺
11	3区	表土一括	須恵器	环	口縁部 体部	10	—	—	—	直縫部に立ち上がる。口縫部ヨコ ナデ。体部内外面削除ナギ。	黒褐色粒子微量	良好	内面高： 2.5YR7/3 浅黄色	

固形 番号	出土 地点	遺構名	種別	器種	埋存 部位	残存 率 (%)	口径 (既定 口径) (cm)	底径 (既定 底径) (cm)	高さ (既存 高さ) (cm)	特徴・手法	胎土	海綿 骨針	焼成	色調	備考
12	7区 14号 ビット	土師器	环	口縁部 ～ 底部	20	—	—	—	直線的に立ち上がる。口縁部ココ ナギ、底部外周斜削ナギ、内面丁 寧なミガキ。	白色粒子・鉛粒・ チャート少量	良好	内面：N2/ 黒色 外面：10YR6/3 にぶい黄褐色	内里环		
13	7区 一括	須恵器	高台 付盤	底部～ 底部	20	—	—	—	体部内外面斜削ナギ。底部切り離 し、調整技術不明。高台断面V字 状で貼り付け、外縁部で接続。	白色粒子・チャ ート少量	良好	内外面： 5Y5/1 灰色			

第5表 出土瓦属性一覧

固形 番号	出土地点	全長 (残存長) (cm)	厚度 (残存厚) (cm)	重量 (g)	凸面痕跡・調整	凹面痕跡・調整	胎土	海綿 骨針	焼成	色調	備考
14	7区一括 (122)	25	(507.3)	正絃子目模写き後ヘカズリ		布目	白色粒子・鉛粒・ チャート・長石 少量	良	内外面： 10YR6/6 明黄色	一枚造り	

第6表 出土遺物計量表

出土地点	1号堅穴建物跡				2号ビット				12号ビット				14号ビット				1区土一括				
	出土遺物	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)	点数	個体数	重量 (g)		
平安時代 中期以前	环・輪型	18	15	161.4	2	2	144											3	3	48.2	
	高台・環・輪型																				
	束・垂頭	1	1	23.5							2	2	90.4								
	長脚金	1	1	7.2																	
	金	1	1	1.5														1	1	36.2	
	不明	1	1	6.7																	
	小 瓦	22	19	200.1	2	2	144			2	2	90.4	2	1	382	3	3	48.2			
	环・輪型	9	9	76.5									4	1	163						
	束・垂頭	82	62	739.6	1	1	72	1	1	7.3			1	1	157	3	3	19.1			
	不明	31	30	59.1												1	1	0.8			
平安時代 中期以後	小 瓦	122	101	874.8	1	1	72	1	1	7.3			5	2	320	4	4	19.9			
	格子目印き +ヘラケズリ																				
	瓦・瓦																				
	ハラケズリ																				
	ナフ																				
	丸 瓦																				
	不 明																				
	小 瓦																				
	小 瓦	144	120	1074.9	3	3	216						2	2	90.4	7	3	1142	7	7	68.1
	例																				
中世以降	小 瓦																				
	例																				
	瓦																				
	瓦																				
	瓦																				
	瓦																				
	瓦																				
	瓦																				
	瓦																				
	瓦																				
中世以降	小 瓦	4	4	29.3	4	4	17.4			2	2	170.7	7	7	2422	48	44	869			
	环・輪型	4	4	29.3	2	2	100						1	1	302	26	23	233.1			
	高台・環・輪型												4	4	28.4						
	束・垂頭				1	1	66				1	1	140.5	6	6	2228	11	11	483.6		
	長脚金												1	1	1.2						
	金												3	2	39.7						
	不明												1	1	19.4	3	3	59.9			
	小 瓦												1	1	510.4						
	小 瓦	3	3	42.4									1	1	186.6						
	ナフ												2	1	50.3						
中世以降	瓦												1	1	125.3	1	1	125.3			
	瓦												1	1	54.6	1	1	54.6			
	瓦												3	3	28.4						
	瓦												1	1	105						
	瓦												1	1	19.2	3	3	59.9			
	瓦												1	1	10.3						
	瓦												1	1	0.9						
	瓦												1	1	10.5						
	瓦												1	1	2.3						
	瓦												1	1	3.3						
中世以降	小 瓦	3	3	103									1	1	103	2	2	297	6	6	503
	瓦	7	7	394	7	7	598	3	3	283.9	5	5	200.8	13	13	456.4	200	171	2829.0		



## 第4章 総括

水戸市の北西部、那珂川中流域右岸の上市台地と呼ばれる河岸段丘上に広がる堀遺跡では、これまでも十数次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代より弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世に及ぶ複合遺跡であったことが明らかにされている。今回調査対象地である第17地点は、堀遺跡の北側に位置しており1～9区に分割された各調査区において奈良時代から近世に至る遺構が確認された。その内訳は奈良～平安時代の堅穴建物跡1軒、溝2条、ピット3基、古代以降の溝1条、中世～近世の土坑1基、ピット12基である。遺物の主体は奈良～平安時代の須恵器と土師器、特に土師器は140点のがほとんどが細片であり、須恵器48点をあわせても総数200点に満たない。264.55m<sup>2</sup>という本地点の調査総面積に対して遺構、遺物の数量はきわめて少ないと言える。

以下、本章では、奈良～平安時代と中世～近世を中心に、本地点における土地利用の変遷を概観したい。

### 1 奈良～平安時代

検出された当該期の遺構は、堅穴建物跡1軒、溝2条、ピット3基である。唯一の堅穴建物跡である1号堅穴建物跡は、南西から北東方向に細長く伸びる本地点南西端の1区に位置する。南半部のみの調査でありカマドや貯蔵穴などの分布は不明であるが、土器の年代から9世紀代の所産と考えられる。2条の溝のうち、3号溝は本地点中央寄りの4区、4号溝は北東寄りの6区に位置する。部分的な調査であり全容は不明であるが、3号溝は上幅0.6m以上、深さ0.3m、4号溝は上幅0.9m以上、深さ0.6m近くを測り、断面形は共に開いたU字状を呈する。長軸方向は、前者がN-26°-E、後者がN-87°-Wを示し対照的である。伴う土器はみられないが、覆土のあり方から古代の所産である可能性が高い。3基のピットのうち、1基は本地点北東側の7区(14号ピット)、2基は北端の9区に位置する(1・2号ピット)。いずれも土師器を伴っており、14号ピットは平面形が隅丸長方形で、長軸約126cm、短軸約85cm、深さ約42cmを測る。1・2号ピットは平面形が円ないし稍円形と推定され、径約84～141cm、深さ約82～96cmを測る。これら1・2・14号ピットは遺構の形状などより、掘立柱建物跡を構成するピットと考えられるが、14号ピットは単独での検出のため詳細な状況は不明である。また、1・2号ピットは同一建物を構成する可能性があるが、他のピットが検出されていないため推定の域をでない。しかし、近接する第9・10地点より多数の掘立柱建物跡が検出されていることから、この付近にまで建物跡の範囲が及んでいたと考えられる。出土した遺物や覆土の状況より、9世紀代に帰属すると考えられる。また、本地点の南側から南西側に広がる第1地点(山武考古学研究所編1994)、第2地点(水戸市堀遺跡発掘調査会編1995)、第16地点(林・渥美 2009)の調査では、奈良～平安時代の堅穴建物跡約45軒が確認されている。今回検出された1号堅穴建物跡が、これらの建物群と近接する位置を占めていることは興味深く、時期的な対応関係からみても同一集落を構成していた蓋然性はきわめて高いといえる。このほかに6点と少ないが、平瓦や丸瓦の破片が出土している。本地点の北東に位置する台渡里廐寺跡との密接な関係が考えられるものである。

## 2 中世～近世

当該期の遺構と考えられるものには土坑1基、溝1条、ピット12基がある。9区で検出された1号土坑は円形ないし楕円形を呈するものと思われるが、一部が確認されただけであり、全容は不明である。断面は鍋底状に近い。覆土のあり方から当該期の所産であった可能性が想定されたものであり、正確な時期は不明である。9区で検出された2号溝は上幅0.3m以上、深さ約0.2mの断面が開いたU字状を呈する小形の溝であり、覆土のあり方から古代以降の所産と考えられる。12基のピットは5～9区に散在しており、特に北東側の8区から9区に集中する傾向をみせている。平均の径約0.4m、深さ約0.3mを測るが、配列に明瞭な規則性は認められない。当該期の遺物として陶器の碗、皿、蓋が出土しているが、いずれも細片であり、全部をあわせても6点と少ない。

## 3まとめ

今回の発掘調査より、古代の溝の検出や掘立柱建物跡の存在の可能性など、検出された遺構に対する積極的な評価が可能だが、何より遺構や遺物の少なさが特に注意される。

これは本調査地点東側に位置する第2地点から数多くの建物跡や掘立柱建物跡が検出されていることと非常に対照的である。本調査地点北西側の発掘調査事例が少ないため、現状の評価となるが、堀遺跡の北側における集落の中心は第2地点付近に位置して、本調査地点付近においては台渡里廃寺跡との中間地点にあたることに起因すると考えられる。したがって今後、本調査地点の北西側の発掘調査が進むにしたがい、本調査地点における検出された遺構・遺物の評価もはっきりするであろう。(林)

## 引用・参考文献

- 浅井哲也 1991 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（I）」『研究ノート』1号 財団法人茨城県教育財團  
1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（II）」『研究ノート』1号 財団法人茨城県教育財團
- 井 博幸・小宮山達雄 1999 「第7章 内原町周辺的主要古墳と出土遺物」『牛伏4号墳の調査』 国土館大学牛伏4号墳調査団編 内原町教育委員会
- 伊東重敏 1975 「Site No.6181 水戸地方における古代窯業の研究（その2） 水戸市田谷廢寺出土古瓦鑑考」『常陸考古学研究所学報第16集』 常陸考古学研究所
- 江幡良夫・吹野富美夫 1998 「水戸市軍民坂跡出土の搔器」『常総台地』14 常総台地研究会  
大森信英 1952a 「渡里村大字廻字西原四号地下式墳」『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部  
1952b 「渡里村大字廻字西原の地下式墳」『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部  
1952c 「渡里村大字渡里字アラヤ 遺跡予備調査に於ける報告」『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 櫻村宜行 1974 「69 椎塙山下横穴群」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県  
1993 「白石遺跡で検出された遺構について」『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財團  
2005 「堀遺跡」『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相—常陸国河内郡を中心として—』茨城県考古学協会
- 川崎純徳 1982 「茨城の装飾古墳」新風土記社
- 瓦吹 堅 1988 「常陸の古印」『婆良岐考古』10 婆良岐考古同人会  
1991 「水戸市台渡里廃寺跡第III・観音堂山・南方・長者山地区の性格についてー」『婆良岐考古』13 婆良岐考古同人会
- 木本翠周 2008 「台渡里廃寺跡出土軒瓦の様相」『国土館大学考古学会平成20年度第2回例会発表要旨』国土館大学考古学会
- 黒澤彰哉 1998 「常陸国那珂郡における寺と官衙について」『茨城県立歴史館報』25 茨城県立歴史館
- 財団法人茨城県教育財團編 1993 『(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書』(茨城県教育財團調査報告第82集)
- 山武考古学研究所編 1994 『茨城県水戸市堀遺跡－住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書－』水戸市教育委員会
- 高井健三郎 1964 『常陸台渡里廃寺跡・野結城八幡瓦窯跡』茨城県教育委員会
- 外山泰久 1993 「アラヤ前遺構(水戸市渡里町)をめぐって」『常総の歴史』13 篠書房

- 生田目和利・稲田健一  
橋本勝雄
- 藤村達巳・塙谷 修  
水戸市アラヤ遺跡  
発掘調査会編  
水戸市教育委員会編
- 2002 「茨城県」第51回 埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開—彩色系装飾古墳を中心に—  
資料集』埋蔵文化財研究会・九州国立博物館講座推進部・福岡県教育委員会  
1995 「茨城の旧石器時代」『茨城県考古学協会誌』7 茨城県考古学協会  
2002 「茨城県における旧石器時代の編年」茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題—』茨城県考古学協会・茨城旧石器シンポジウム実行委員会・ひたちなか市教育委員会
- 1982 「第2章 調査報告（1）古墳群の立地と環境」『常陸安戸星古墳』安戸星古墳調査団編  
水戸市教育委員会
- 1992 「水戸市アラヤ遺跡—北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書一』  
1998 「水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版」  
2005 「台渡里廃寺跡—範囲確認調査報告書一』（水戸市埋蔵文化財調査報告第1集）  
2006a 「台渡里廃寺跡—市道常盤17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』（水戸市埋蔵文化財調査報告第4集）  
2006b 「台渡里遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（水戸市埋蔵文化財調査報告第5集）  
2007a 「平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』（水戸市埋蔵文化財調査報告第11集）  
2007b 「アラヤ遺跡（第2地点）—市道常盤10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（水戸市埋蔵文化財調査報告第12集）  
2008a 「台渡里遺跡（第39次調査）—公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（水戸市埋蔵文化財調査報告第15集）  
2008b 「渡里町遺跡（第5地点）—市道常盤31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（水戸市埋蔵文化財調査報告第16集）  
2009a 「平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』（水戸市埋蔵文化財調査報告第22集）  
2009b 「堀遺跡（第16地点第1次調査）—市道渡里48号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）一』（水戸市埋蔵文化財調査報告第33集）  
2009c 「堀遺跡（第18地点）—市道渡里31.31号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（水戸市埋蔵文化財調査報告第33集）  
水戸市教育委員会・  
株式会社化研編  
水戸市台渡里廃寺跡  
発掘調査会編
- 水戸市堀遺跡発掘調査会編  
渡辺俊夫
- 1995 「水戸市台渡里廃寺跡—都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書」  
1981 「水戸市堀遺跡—堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』  
「第5章 砂川遺跡」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4 宮部遺跡・鹿の子A遺跡 砂川遺跡』（茨城県教育財团文化財調査報告第XVI）財団法人茨城県教育財团



写 真 図 版





調査区全景



1区全景（東より）



1号竪穴物跡（西より）



1号竪穴建物跡遺物出土状況（北東より）



1号竪穴建物跡粘土出土状況（北東より）

図版2



1号テストピット（北より）



2区全景（南西より）



3区全景（北東より）



4区全景（北東より）



3号溝（北より）



5区全景（北東より）



7号ピット（北より）



2号テストピット（北西より）



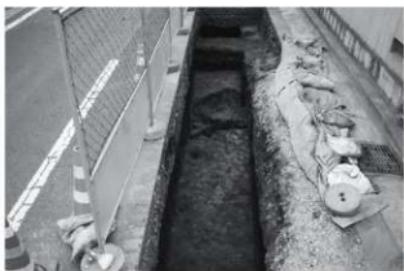
6区全景（南西より）



4号溝（南東より）



8号ピット（南より）



7区全景（北東より）



14号ピット（南西より）



8区全景（北東より）



11・12号ピット（西より）



3号テストピット（北西より）

図版4



9区全景（南西より）



9区南側全景（北東より）



9区中央部全景（南西より）



9区北側全景（南西より）



1号土坑（西より）



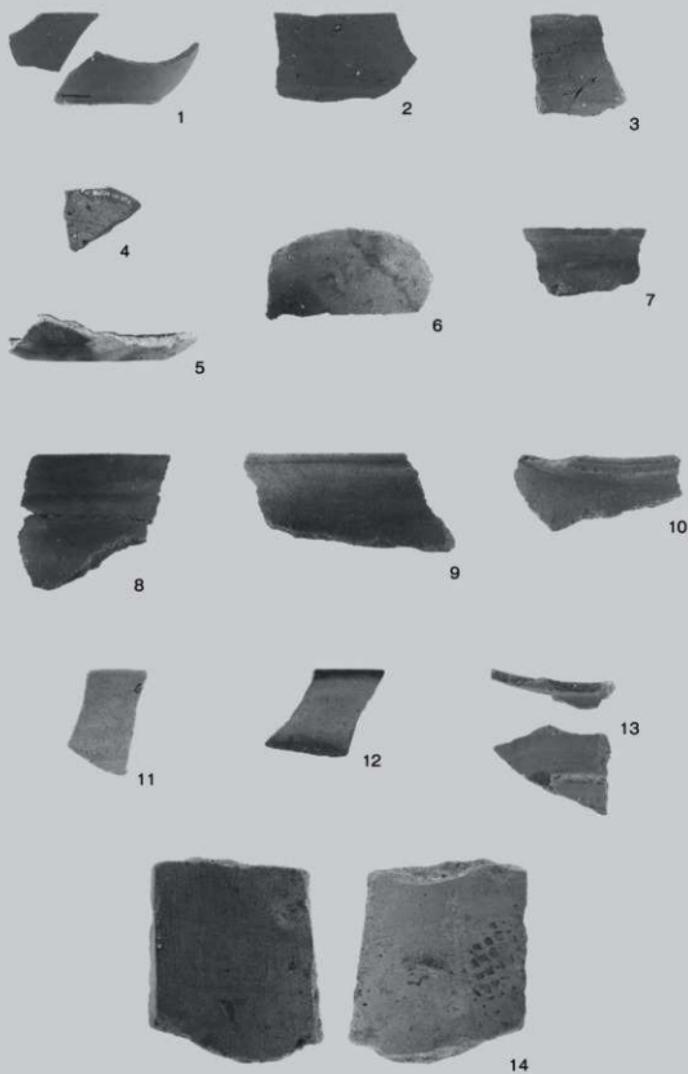
2号溝（北より）



ピット群（北東より）



作業風景



出土遺物

**報 告 書 抄 錄**

ふりがな 書名	ほりいせき（だいじゅうななちてん）堀遺跡（第17地点）						
副書名	市道渡里35号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第34集						
編集者名	渥美 賢吾・林 邦雄						
著者名	渥美 賢吾・林 邦雄・松浦 史明						
編集機関	水戸市教育委員会						
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎ 029-224-1111						
発行年月日	2009(平成21)年12月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
ほりいせき 堀遺跡	水戸市渡里町3209番2 地先～堀町400番3地先 (市道渡里35号線)	201	064	36° 24' 29" 140° 26' 10"	2009.11.2 ～ 2009.12.12	264.55 m <sup>2</sup>	公共下水道工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀遺跡	集落跡	奈良・平安	堅穴建物跡1 溝2 ビット3	須恵器、土師器、瓦	奈良・平安時代の堅穴建物跡は本地点南西端の1区に位置する。本地点の南側から南西側に広がる第1・第2・第16地点では当該期の堅穴建物跡約45軒の分布が確認されており、本地点例を含めて同一集落を構成していた可能性が高い。また、掘立柱建物跡を構成すると考えられるビットも3基検出されているが、ごく一部の検出である。中・近世の遺構は本地点の中央部から北東寄りに分布する。土坑や溝は一部が確認されたものがほとんどであり、性格は不明である。ビットの配列にも明瞭な規則性は認められない。
		中世・近世	溝1 土坑1 ビット13	陶器	

\*北緯・東経は世界測地系。

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・手書きによる。 例) ③ 64-17 SI-1 フクドのように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳、図面台帳、写真台帳があり、検索が可能なように作成している。合計1冊(綴り)。
遺物保管方法	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお、未使用分については種別毎に分類、収納してある。

## 水戸市埋蔵文化財調査報告

第 1 集	台渡里廃寺跡—範囲確認調査報告書—	2005 年 3 月発行
第 2 集	台渡里廃寺跡 一市道常磐 17 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）—	2005 年 4 月発行
第 3 集	大鋸町遺跡 一グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2005 年 8 月発行
第 4 集	台渡里廃寺跡 一市道常磐 17 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）—	2006 年 3 月発行
第 5 集	台渡里遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2006 年 3 月発行
第 6 集	吉田古墳 I—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第 3 次調査報告書—	2006 年 3 月発行
第 7 集	大鋸町遺跡（第 3 地点） 一市道浜田 207 号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2006 年 3 月発行
第 8 集	坏遺跡（第 3 地点） 一ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007 年 3 月発行
第 9 集	坏遺跡（第 4 地点） 一ブランタンコリーヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007 年 3 月発行
第 10 集	吉田古墳 II 一史跡整備計画に伴う吉田古墳群第 1 号墳の第 3 次発掘調査報告書—	2007 年 3 月発行
第 11 集	平成 17 年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007 年 3 月発行
第 12 集	アラヤ遺跡（第 2 地点） 一市道常磐 10 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007 年 3 月発行
第 13 集	米沢町遺跡（第 5 地点） 一住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007 年 3 月発行
第 14 集	大串遺跡（第 7 地点） 一介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008 年 3 月発行
第 15 集	台渡里遺跡（第 39 次調査） 一公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008 年 3 月発行
第 16 集	渡里町遺跡（第 5 地点） 一市道常磐 31 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008 年 6 月発行
第 17 集	渡里町遺跡（第 6 地点） 一市道常磐 34、275 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008 年 6 月発行
第 18 集	薄内遺跡—移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008 年 8 月発行
第 19 集	堤遺跡（第 9 地点）—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008 年 9 月発行
第 20 集	元石川大谷原遺跡—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008 年 12 月発行
第 21 集	台渡里 I—平成 18 年度長者山地区範囲確認調査概報—	2009 年 3 月発行
第 22 集	平成 18 年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2009 年 3 月発行
第 23 集	吉田古墳 III 一史跡整備計画に伴う吉田古墳群第 1 号墳の第 4・5 次発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行
第 24 集	町村遺跡（第 1 地点）—共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行
第 25 集	東組遺跡（第 1 地点）—物販舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行

第 26 集	荷鞍坂遺跡（第 1 地点） —コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行
第 27 集	大鋸町遺跡（第 8 地点）一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行
第 28 集	雁沢遺跡（第 1 地点）一工場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行
第 29 集	渡里町遺跡（第 7 地点） —市道常磐 23, 31, 307 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 6 月発行
第 30 集	台波里 2 —市道常磐 283 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台波里第 51 次)—	2009 年 6 月発行
第 31 集	若林遺跡（第 1 地点）一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 8 月発行
第 32 集	堀遺跡（第 16 地点第 1 次調査） —市道常磐 48 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）—	2009 年 10 月発行
第 33 集	堀遺跡（第 18 地点） —市道常磐 31, 41 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 11 月発行
第 34 集	堀遺跡（第 17 地点） —市道常磐 35 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 12 月発行

水戸城跡 三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書 2006 年 9 月発行

### 水戸市埋蔵文化財調査報告第 34 集

## 堀遺跡

(第 17 地点)

— 市道常磐 35 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印 刷 平成 21 年 12 月 25 日

発 行 平成 21 年 12 月 25 日

編 集 株式会社東京航業研究所

発 行 水戸市教育委員会

印 刷 野崎印刷紙器株式会社

〒 230-0001

横浜市鶴見区矢向 3-15-27

TEL 045-571-3508